

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

岩田

豊橋校区史

6

Iwata







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 岩田



東岩田町のお車（岩田八幡宮祭礼）

私たちの町 岩田

岩田運動公園

市民のアウトドアスポーツの中心的な存在の岩田運動公園。

昔、このあたりの水田のため池として、その役割を果たしてきた水神池。現在は公園として整備され、市民の憩いの場として親しまれている。



春は桜、初夏はアジサイと新緑、秋の紅葉、そして、冬の渡り鳥。四季折々に人々を楽しませてくれる水神池の周り。



四季を通して、朝早くから公園のまわりの住民が三々五々集まってきて、ラジオ体操、ウォーキングに汗を流す。

6時半からのラジオ体操で体をほぐした後、朝霧の中、澄んだ空気を吸って足取りも軽く、一周約2kmのランニングコースを回り汗を流す。





スポーツ

岩田運動公園には、野球場、球技場、テニスコートなどが完備されていて、各種の競技や市民の体力づくりとしてのスポーツがさかんに行われている。

年に一度、豊橋市民球場のナイターでプロ野球の公式戦を楽しむ市民。



他社から導入した新型車両が、赤岩口を出発して井原町内を軽快に走り、豊橋駅前へと向かう。



交通

市電の通る町として、岩田校区内に「井原」「運動公園前」「赤岩口」と三つの電停があり、通勤、通学の交通手段として大きな役割を果たしている。



線路は、井原から赤岩口と運動公園前へと分かれて延びている。

路面電車が全国各地で廃線になってきた中、環境にやさしいクリーンな交通機関として、市民に親しまれこの地区の発展に寄与している。



岩田地区内で最も交通量の多い市電通りの商業地区。
豊橋の東部地区で古くから栄えたところである。



岩田校区の東側を南北に通る東三河環状線
多米の山並みにトンネルが掘られ、平成21年には東名高速道路の豊川インターチェンジまでつながる予定である。

**豊校区と境をなす
中岩田のバス路線**



大きな夢と
希望を抱いた
子どもたちに
未来を託す
子ども達よ
羽ばたけ

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様にご改めてお礼を申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
岩田校区総代会長

篠 原 秀 嗣

豊橋市が、平成18年に市制100周年を迎えるにあたって、16年度総代会理事会で何か記念事業を行おうとの話がもちあがり、各校区で校区史の発行と地域イベントを行うことが決まりました。早速岩田校区総代会で実行委員会を立ち上げ、歴史の執筆に実績のある川瀬芳彦さんに編集長にご就任いただき、服部巨志前校区総代及び各町総代で資料集めのスタートを切りました。地元の皆様のご協力によって貴重な資料が沢山集められました。平成17年度より執筆活動が始まり、岩田の田尻村、岩田村、平川、井原などの歴史、変遷が浮き彫りにされてきました。戦後の復興から高度成長期に向けて岩田は大きく変貌し発展を遂げました。この歴史を50ページでまとめるのはまことに困難でしたが、自分たちの住む岩田を少しでもご理解いただき、子どもたちが自分のふるさと、生まれ故郷を知り、誇りをもって、将来への希望と発展への布石に、少しでも役に立てばと願っています。今回の「校区のあゆみ 岩田」作成にあたり、多くの資料をご提供くださった皆様、編集責任者としてご尽力いただきました川瀬芳彦さん、服部巨志さん、大野脩さん、皿井信さん、瀧崎吉伸さん始め平成16、17、18年度の各町総代、市職員サポーター石川周子さん、石川欣吾さん、その他多くの皆様にご協力、ご支援いただきましたことに深く感謝申し上げます、お礼のご挨拶とさせていただきます。

目次

CONTENTS

第1章 自然と環境

- 1 岩田の位置 7
 - (1) 位置 7
 - (2) 地形 7
- 2 岩田の自然 8
 - (1) 岩田の動物 8
 - (2) 岩田の植物 9

第2章 歴史と生活

- 1 岩田のあゆみ 11
 - (1) 田尻村のあゆみ 11
 - (2) 平川新田の開発 13
 - (3) 井原のあゆみ 14
- 2 開けゆく岩田 16
 - (1) 岩田第一土地区画整理事業 16
 - (2) 岩田第二土地区画整理事業 16
 - (3) 平川本町土地区画整理事業 18
 - (4) 平川南部土地区画整理事業 19
 - (5) 多米土地区画整理事業 19
 - (6) 農業の移りかわり 20
- 3 活動する岩田 22
 - (1) 校区総代会 22
 - (2) 社会教育委員会 23
 - (3) 社会体育委員会 23
 - (4) 子ども育成委員会 23
 - (5) 防犯委員会 24
 - (6) 清掃指導委員会 24
 - (7) 更生保護女性会 24
 - (8) 消防団岩田分団 24
 - (9) 校区老人会連合会 25
 - (10) 民生・児童委員会 25
 - (11) 岩田校区市民館 25
- 4 伸びゆく岩田 26
 - (1) 中岩田の町並み 26
 - (2) 県営岩田団地 30
 - (3) 東岩田の町並み 31
 - (4) 平川本町の町並み 33
 - (5) 平岡区の町並み 33
 - (6) 北岩田の町並み 34

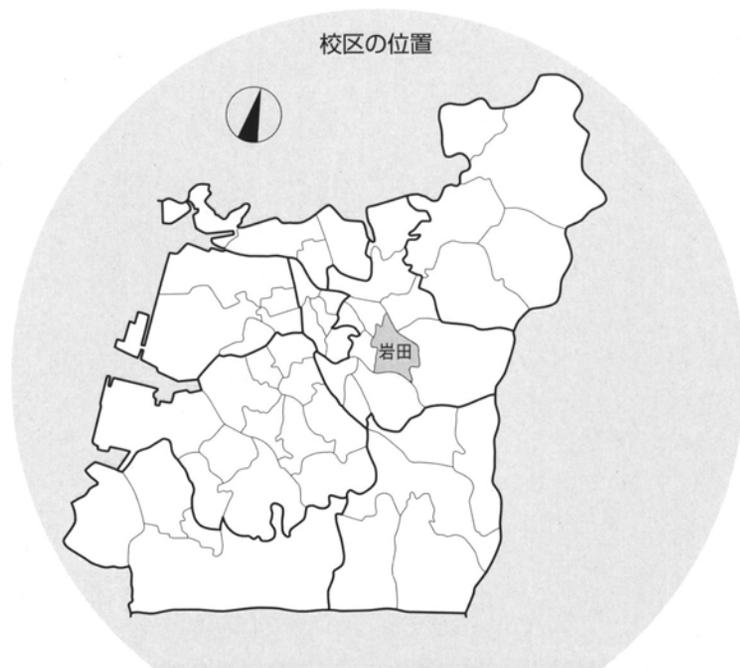
第3章 教育と文化

- 1 岩田の教育 38
 - (1) 寺子屋から学校へ 38

- 2 岩田の学校 39
 - (1) 豊橋市立岩田小学校 39
 - (2) 豊橋市立豊岡中学校 39
 - (3) 豊橋市立東部中学校 40
 - (4) 豊橋市立東陽中学校 41
 - (5) 愛知県立豊丘高等学校 41
- 3 岩田の幼稚園・保育園 42
 - (1) 学校法人豊岡学園 豊岡幼稚園 42
 - (2) 社会福祉法人 岩田保育園 42
 - (3) 社会福祉法人育栄会 ひばり保育園 42
- 4 岩田の風土記 43
 - (1) 岩田八幡宮 43
 - (2) 貴船神社 44
 - (3) 琴平神社 44
 - (4) 謎の一本灯籠 45
 - (5) 源立寺境内の句碑 46
 - (6) 平川神明宮 46
 - (7) 如意山 祥雲寺 47
 - (8) 勝林山 源立寺 47
 - (9) 平川山 一月院 47
 - (10) 田龍山 西福寺 47
- 5 岩田周辺に伝わる民話 48
 - (1) 金次の椎の木 48
 - (2) 宝珠寺の子守地蔵 48
 - (3) 三河富士のはなし 48
 - (4) 山の背比べ 49
 - (5) 悟本寺のお地藏様 49
 - (6) 徳合長者 49
 - (7) 米山 49

- 参考文献 50
- 編集後記 52

表紙：岩田運動公園の桜



第1章 自然と環境

1 岩田の位置

(1) 位置

岩田の位置 豊橋市は、愛知県の東端、渥美半島の基部にあたり、東は静岡県、西は三河湾、南は遠州灘に面し、南西部で渥美半島と接続し、北から西は豊川を境として新城市・豊川市と接している。

岩田校区は、豊橋市の東部にあり、愛知県と静岡県との県境をなす「弓張山系」の南端の北西部に位置している。古くは田尻原と呼ばれた洪積世台地である。近年は土地区画整理事業の完工により快適な環境を持つ住宅地として生まれ変わった。

岩田地内から望むことのできる「弓張山系」は、静岡県側からは「湖西連峰」と呼ばれ親



東岩田地内から弓張山系の南部を望む

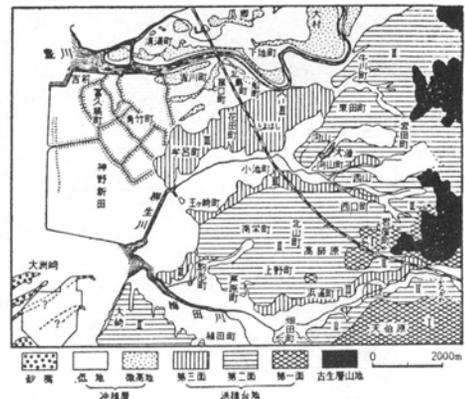


東岩田地内から弓張山系の東部を望む

しまれている。この山系は豊橋市南東部の二川町付近から東北に発達し、次第に高くなり、赤石山脈へと続いている。

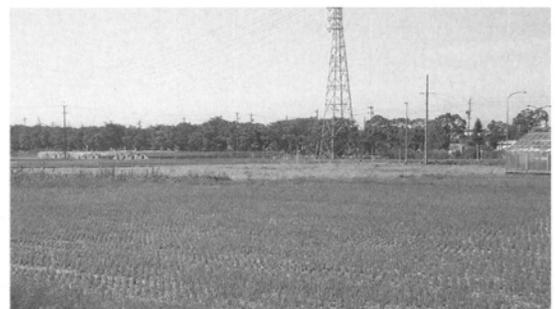
(2) 地形

岩田の地形 豊橋市の地形は、大別して西部の豊川がつくった沖積低地と、東部・南部に広がる洪積台地の二つに分けられる。岩田校区は洪積台地に開かれた広くなだらかな土地である。



豊橋の地形（地方都市の研究より）

土地区画整理事業により商業地・住宅地へと変貌を遂げたが、以前は、両留池、長尾池、利兵池、上池、下池、岩鼻池、水神池などを持つのどかな田園地帯であった。



岩田地内を走る東三河環状線東側に見られる区画整理されたほ場

しかし、決して地味豊かな土地ではなかった。古文書には「土地淡赤ニシテ砂石ヲ雜フ」「土地肥沃ならず、礫質粘土」と記されている。赤土の酸性土壌が台地を覆っていることの証である。

2 岩田の自然

(1) 岩田の動物

水神池の野鳥 水神池を取り囲む一帯は、30年前までは、池の面積も広く、南部に湿地帯や芦原が広がって、多くの野鳥たちの生息地であった。また、タカの仲間のチュウヒやハイロチュウヒも生息していた。夏鳥のオオヨシキリのさえずりもにぎやかな、その繁殖地でもあった。

その後、公園化が進み豊橋市民球場などができて、湿地帯はなくなってしまった。北部に位置する「水神池」が面積こそ狭まったが、公園内の池として残り、周りの樹木と共に、野鳥たちの生息環境として残っている。



豊岡中学校北部の敷地から水神池方面を望む（1974年）

現在の水神池は、都市公園の内部にある池なので人々の往来も激しく、人間に対して警戒心の強い野鳥は生息していない。

やはり、水神池の野鳥といえば、冬のカモの仲間の生息である。北のロシアやその北極圏で繁殖を終えたカモの多くが日本各地で越冬生活をする。特に、これらの都市公園でのカモは、山間や農村地帯の湖沼で暮らすカモたちが、猟期（11月15日～2月15日）に銃猟

に逢い、その危険を避けて、安全な都市公園の池に避難する傾向がある。

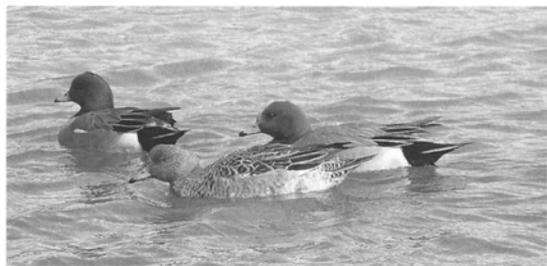
従って、この水神池のカモも猟期には数を増す傾向にある。水神池で見られる冬鳥のカモは、ヒドリガモ、オナガガモ、キンクロハジロが数の上では優位を占めている。ときには、コガモ、マガモ、ホシハジロ、ハシビロガモなどを発見することもある。

また、時には珍しいカモのアメリカヒドリを見ることもできる。



噴水もあり、岸には人々が行き来する水神池だがカモの数は多い

給餌に応える多くのカモはヒドリガモである。時には、オナガガモもその仲間に入ることもある。



水神池の水面に羽を休めるヒドリガモ

クイナの仲間のバンも繁殖した年もある。そして、同じクイナの仲間のオオバンやヒクイナの生息も確認されている。

水神池とそれを取り巻く公園の常緑広葉樹は、年間を通して野鳥たちのよい生息環境となっている。秋から春にかけては、冬鳥たちの餌場となっている。秋からはモズやムクドリ姿が見られる。冬鳥としてジョウビタキ・アオジ・カシラダカ・シロハラなどにも出会える。春と秋の桜の木に毛虫が発生する

頃には、渡りの途中に毛虫を食するカッコウヤツドリなどの姿を見ることができる。

(2) 岩田の植物

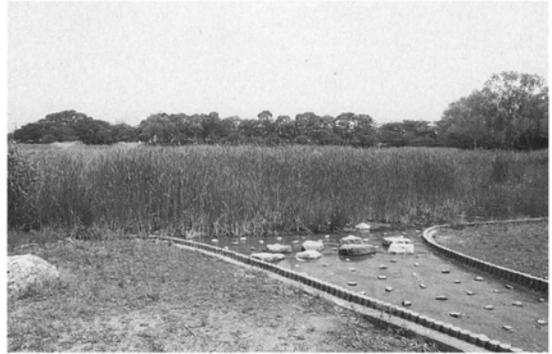
スダジイ 岩田校区は市街地化が進んでおり、自然に近い林や植生が残っているのは、わずかに岩田運動公園とその周りの神社やお寺の社叢だけである。

運動公園の東側に平川神明宮がある。この社叢は、スダジイを中心とした立派なもので、元々は植栽された可能性が高いが、小規模ながらよく発達した照葉樹林になっている。この林の中では、体長が10cmを超えるヤマナメクジを観察することができる。市街地の中では大変珍しいことである。スダジイの木のうろにはニホンミツバチが巣を作っていたこともある。



平川神明宮のスダジイ

水生植物 水神池は運動公園の整備とともにその姿を大きく変えてしまった。昔は現在の野球場の位置に空池があり、二つのため池の間を通る細い道は、うっそうと茂るヤナギやハンノキの林に囲まれ、昔話のお化けの登場しそうな雰囲気さえあった。過去にはガマやヨシが岸辺に茂り、さまざまな水生植物を観察できる池であったが、改修工事によってその多くを失ってしまった。最近、また、ガマやヨシが復活してきている。サンカクイ、カンガレイも多くなってきた。水面にはヒシが浮かんでいる。池の中に島がつくられている



現在の水神池 ガマが茂っている

が、セイタカアワダチソウやチガヤが生い茂っている。水神池に流れ込む水路は比較的水質がよいようで、そのために市街地の公園の池としては特別な植物が数多く残っている。



サンカクイの群落の中にムサシモが生育

なかでも、水中に生育する小さな種子植物のトリゲモの仲間、ムサシモとサガミトリゲモの2種類が観察できる。これらの沈水性の植物は、ため池の富栄養化や水田への農薬散布とともにどんどん生育地を奪われ、いまや絶滅の危機にある。中でも先述の2種類は愛知県内でもほとんど確認をされていない希少種である。ちなみにムサシモは環境省レッドデータブックでも愛知県レッドデータブックでも絶滅危惧ⅠA（もっとも絶滅の危険が大きい種のグループ）、サガミトリゲモは環境省ではⅠB、愛知県ではⅡ類に位置づけられている。

池の水質が維持されて、これらの希少な植物が生き続けていける環境が保たれることを期待したい。



野球場と水神池の間の美しいケヤキ並木

植栽された樹木 運動公園にはケヤキやイチョウ、ヤマモモ、クスなどの多くの樹木が植栽されている。なかでも、水神池を大きく取り巻くように植えられたソメイヨシノは、毎年見事な花をつけ、ランニングやウォーキングをする人々の目を楽しませてくれる。小鳥の餌となる実をつける木も多く、植え込みの中には鳥が種子を運んだと見られる幼木がかなり混じっている。ヒラドツツジやアジサイ、トベラ、シャリンバイ、サンゴジュなど、多くの花木も植栽されており、四季折々に市民の憩いの場となっている。



サンゴジュの植え込みの中に生えたイヌビワの幼木。鳥が種子を運んだのだろう。

草花たち 公園から離れて住宅街に目を向けると、きれいに整備された道路の街路樹や、よく手入れされた庭木が目映る。街路樹はハナノキ、イチョウ、アメリカフウなどが植えられており根元にはスズメノカタビラやオオバコ、ウラジロチチコグサ、エノコログサなどの雑草が目につく。古くからの住宅には



果樹園の雑草。セイヨウタンポポやニワゼキショウ、ノゲシなどが見られる。

竹藪を伴った屋敷林が残されており、クロガネモチやクロマツ、エノキなどの古木も散見できる。所々に残されたクリやウメ、カキ、ミカンなどの果樹畑にはネズミムギやアキノエノコログサ、シロツメクサ、オニウシノケグサ、ナガバギシギシ、チガヤ、セイヨウタンポポ、ノゲシ、ニワゼキショウ、イヌムギなどが生えている。畑地の耕作をやめて、美しく草花を植え付けた花壇にしてあるのも所々に見られる。

この校区は区画整理が進み人に利用されるようになった土地ばかりである。耕作地や道路、宅地など人が利用している土地に勝手に侵入してきた植物を雑草という。最近では帰化植物がとて多い。帰化した雑草の中には、ナガミヒナゲシやタカサゴユリのように美しい花を付けるために除去されず勢力をどんどん広げているものもある。



ナガミヒナゲシ。雑草だが花が美しく、しばしば抜かれずに残っている。

第2章 歴史と生活

1 岩田のあゆみ

(1) 田尻村のあゆみ

田尻開村 寛永4年(1627)、源立寺の開山者である善立和尚と仁連木村の5人、羽田村の2人、計8人が新田開発に取り組み田尻村を開いたと言い伝えられている。

田尻誌には『享保17年(1732)の「居屋敷の覚」によると村には屋敷は9屋敷あった。その一番東が及部の屋敷と考えられる』と記されている。平成3年(1991)11月に書かれた補田尻誌には『及部は田尻の草分け百姓7人の中には、入っていない』とあり、田尻村は8名によって開村されたと考えて間違いないと考えられる。

田尻村の戸数の変化

寛永4年(1627)	8戸(及部を加えて9戸)
元禄13年(1700)	57戸(八幡宮棟札)
享保17年(1732)	83屋敷(百姓屋敷の覚え、 神社2、寺2を含む)
寛政7年(1795)	68戸(年貢を納めた家)
文化8年(1811)	72戸
文政10年(1827)	85戸(神社2、寺院2を含む)
天保2年(1831)	71戸(金毘羅大権現棟札)
万延2年(1861)	83戸(村勘定)
明治9年(1876)	81戸
大正7年(1918)	75戸(初穂料を供えた人)
昭和3年(1928)	80戸(琴平神社寄付者)
昭和42年(1967)	125戸(借家約25戸を含まず)

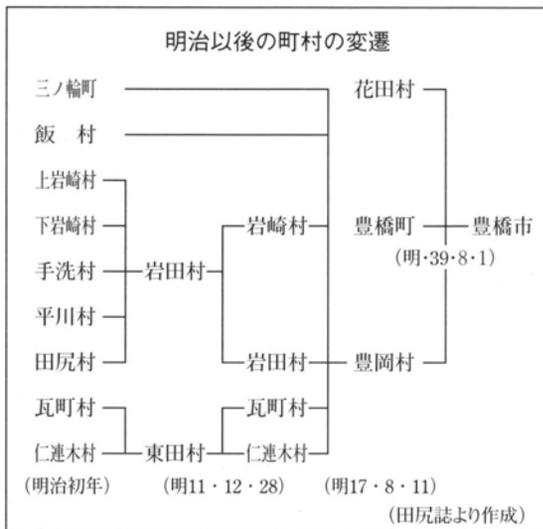
(とよおか誌)

寛永7年(1630)に、村人たちは源立寺の北隣に、寺の鎮守として金比羅神を勧誘して祀った。今の琴平神社である。金比羅様は田尻村の人のみならず、近郷近在の人たちの願い事は何でも聞いてくれる神様と評判で多くの参拝客でにぎわった。

明治11年(1878)に、田尻村は、近郷の上岩崎村、下岩崎村、手洗村、平川村と合併して岩田村となり、明治17年(1884)には豊岡村となった。そして、明治39年(1906)には豊橋市となった。しかし、豊橋市街から遠隔の地であったため、豊橋市街の発展を横目に見ながら、なかなか深い眠りから覚めることはなかった。

『あさひさして豊岡の 森は緑に輝いてわたるそよ風 おお空高く ひばりが呼んでる 希望の窓は われらの学校 ああわが母校』と豊岡中学校の校歌にあるように、昭和40年代に入っても戸数は、わずか125戸の小さな村に過ぎなかった。

明治期の田尻村 明治35年(1902)刊行の豊岡村是には、『渥美郡豊岡村として岩田、岩崎、飯村、三ノ輪、瓦町、東田の6大字より豊岡村は成り立っており、交通の便は、南部に東海道があり、北部は岩崎往来のみで村内の耕作道は農車を通せず不便なり』と記述されており、不便な村の様子をうかがい知ることができる。この頃は、田尻村は豊岡村に属していた。また「土地肥沃ならず、礫質粘土」と、古文書にあり、農民は田畑の耕作に苦勞したようである。合併による田尻村の変遷を詳しくみてみよう。



明治11年（1878）の合併後の明治17年（1884）、田尻村は岩崎村と岩田村の分村にともない岩田村に。そして、明治22年（1889）に、近隣の東田・瓦町・飯村・三ノ輪の6か村との合併で豊岡村となった。

明治39年（1906）8月1日には花田村・豊岡村が豊橋町に合併。豊橋町は市制を施行、全国で第62番目の市となった。

だが、相次ぐ合併にもかかわらず農民の暮らしは苦しかったといわれている。

岩田村から豊岡村へ 『本村民は一般に米麦を主食とする。上等の者は主に米飯を喫するが、中等の者は米麦を混用し、下等の者は多く麦飯を喫し、秋季には甘藷を副食する。維新前にありては、ヒエ、アワ類を常食としたけれども近年にいたりては、これらのものを常食す』と、衣食住についての記述が「豊岡村是」にある。

住居についても『養蚕の普及とあいまって蚕室は居室を兼用するをもって構造を改良し衛生面に適するは昔日の比にあらず』と、家屋の構造や変化の様子を、農家の副業としての養蚕と結びつけて述べている。

豊橋の製糸業が盛んになるのは明治30年代に入ってからである。特に、玉糸製糸業の発達はめざましく大正・昭和初期にかけて「蚕

都とよはし」の名をほしいままにした。繭の需要に支えられて畑に桑が植えられた。

岩田においても、こうした影響を受け、戦後まで桑畑が点在し、蚕を飼う農家がいくつも見られたが、絹に替わる化学繊維の普及による製糸業の衰退とともに姿を消した。

町村合併 岩田には明治39年（1906）の市制施行までに6度にわたる行政区画上的変動があった。昭和に入ってから、昭和7年（1932）と昭和30年（1955）と二度の町村合併を経験する。

昭和7年（1932）の町村合併は、下地町、下川村（牛川）、石巻村大字多米、牟呂吉田村、高師村を豊橋市に編入するものであった。

内務省に提出した願書には『石巻村大字多米は市内岩田町と同一区域にあって、小学校児童の一部は豊橋市に委託されており、また、上水道給水場が設けられている』と記載されている。石巻村大字多米は、今の多米校区で多米が岩田と深いつながりを持っていたことをものがたっている。岩田が豊橋市岩田町と呼ばれるようになったのは、大正12年（1923）である。昭和7年の合併には産業・文化都市を目指す豊橋市の強い願いが込められていた。

20万都市へ 昭和30年（1955）の合併は、20万都市への夢をのせた町村合併であった。合併区域は二川町・老津村・前芝村・石巻村の5町村である。この合併によって豊橋市は、岩田を含む多米、二川などの東部内陸部への進出と南部臨海部への進出を果たす大きな足がかりを作った。

「工業は水辺に下り、住宅は丘を上がる」との言葉にもあるように、臨海部は、港湾の整備と臨海工業用地の確保、東部内陸部、南部地区は、文教地区・住宅地として整備するという計画が立てられた。都市化、市街化の波は、岩田地区にも着実に迫っていた。土地区画整理事業は時代の要請でもあった。

(2) 平川新田の開発

平川新田 豊橋市の東北部は、江戸時代に多くの新田が開かれた。なかでも平川新田の開発は内陸部の新田開発において最も大規模なものであったといわれている。

平川新田は、寛文7年(1667)10月、篠田村(宝飯郡一宮町)の弥兵衛と吉田榎河岸の利兵衛の両名が、時の領主小笠原長矩に願い出て開発を始めた。

範囲は下岩崎村・田尻村の西方から瓦町・仁連木村に至る原野、いわゆる田尻原一帯であった。この新田開発が、当初の計画通りに行われたか否かは定かでない。

しかし、12年目の延宝6年(1678)までには、少なくとも、田41町7反(41ha)、畑17町7反(17ha)の新田が開発されたと記録されている。

用水の確保 平川の地は、洪積台地で水が乏しく、新田開発に際して用水の確保が、どうしても必要であった。寛文7年(1667)に岩崎葦毛の下にため池(利兵池)を造成する。また、蟬川(朝倉川上流)にも井堰を設けて水を得るなどの工夫を凝らした。

しかし、蟬川の水は下岩崎村が使っていたため、平川新田では、大雨などで余水のある時や水需要の少ない9月から翌年の3月までしか使用することができなかった。

そこで、寛文10年(1670)平川地内に水神池を造り、春から夏にかけての田植えに必要な水を蓄えた。貞享5年(1688)には、その南に新池(空池)も造った。しかし、両方の水を得るためには、用水路を新設しなければならず、また、他村地内を通るため、大きな問題となった。これらについては、藩の許可や仲介を得て、新田の土地との交換を図るなどして解決が図られた。

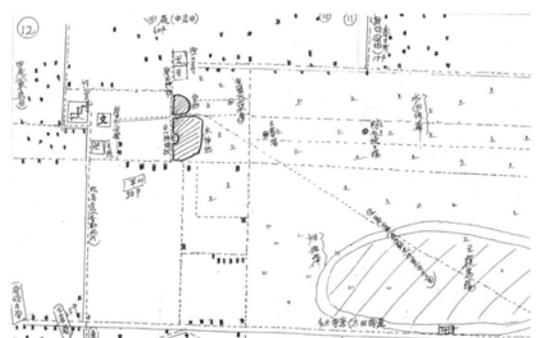
二つの街道 この辺りには2本の街道が通っていた。一つは伝馬街道。この街道は、平川

の東を通る南北道で、現在の岩田小学校の東側を通り、二川宿に達していた。参勤交代のときの大名行列に助郷を割り当てられた嵩山、金田、牛川、多米の農民や人夫たちが馬を引いて通った。

東田方面からは伝馬支道があった。今の東田電停方面から水神池、空池の間を通り祥雲寺の地点で伝馬道に合流し、丸山下、飯村、火打坂、岩屋観音、二川宿に至る道筋である。

もう一つは、太田街道と呼ばれていた多米街道。この街道は平川の北端に位置する東西道で、遠州(浜名湖あたり)から多米峠を越え、多米郷に入り滝の谷の不動の滝、徳合長者の屋敷跡の上を通り朝倉川を渡り井原郷を通り、吉田宿に達していた。

今は土地区画整理事業でなくなったが多米橋の東100mあたりの所に、松の大木が5、6本あり、自然石が7、8個あって、旅人や行商人たちが天秤棒や背負子で海の産物や山の産物を持って吉田の宿へ入る前に、ここで休んだ。そして、汗を拭き、旅装を整え、井原を通り東雲、坂下、八丁通、大手門前へと向かった。



大正初期の伝馬街道と多米街道の絵地図

東田町字井原と東雲町入り口付近には、今も、この街道のあとが僅かに残っている。多米の地には往時をしのぶ道しるべも残っている。

平川は、こうした地理的条件にも恵まれ、新田開発の時代から農家戸数が徐々に増加し豊かな農村地帯として栄えた。

押し寄せる市街化の波 昭和初期から戦後にかけて、東田町、瓦町などの東部地区の市街化が著しく進んだ。

これらの町に近い平川新田は、その影響を強く受けることとなった。

年 代	農 家 数
新田開発時代	14戸
明治元年 (1868)	18戸
大正元年 (1912)	20戸
昭和20年 (1945)	23戸

平川の農家戸数の変遷

昭和27年 (1952) に始まる土地区画整理事業で、新田の一部が市街化し、東光町、栄町などが生まれた。

昭和38年 (1963) からの土地区画整理事業では、市街化は新田の中央部にまで及び、平川南町、豊岡町などの町が新しく誕生した。

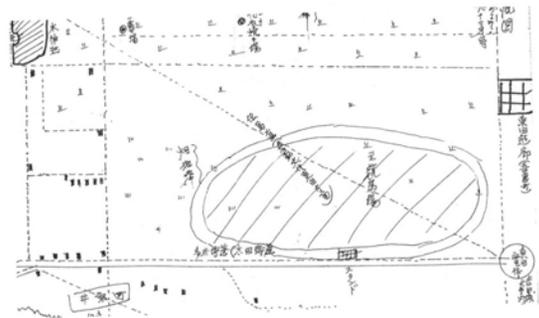
さらに、昭和48年 (1973) に始まった平川本町土地区画整理事業により、平川新田は完全に市街地と化し往時の姿は一変した。

新田開発時に造成され灌漑用水として利用されていた水神池と新池は、岩田運動公園と住宅地の一部となった。生まれ変わった水神池は市民の憩いの場として親しまれている。

まぼろしの競馬場 東光町と栄町に競馬場があったといっても多くの市民も、この地に住む住民たちも、にわかには信じがたいことに違いない。しかし、確かに草競馬場が存在した。競馬場のまわり、また、その真ん中は水田と畑であったと語り伝えられている。

「私は子ども時代 (大正初期)、水田や畑の耕作の手伝いをしながら、腰を伸ばして競馬をよく見ていました。」(当時を知る古老談)

だが、この競馬場は維持管理が困難なため、数年で廃止となった。「その後は、数回、牛の綱引き大会が行われ、子どもたちがよく見物しておりました。」(前述、古老談)



大正初期にあった競馬場の絵地図

(3) 井原のあゆみ

10名の発起人 果てしなく原野の広がる開墾間もなき地に、各地から転住した10戸の住民たちが平川村から独立して、明治42年 (1909) 1月、新しく井原村を結成した。(中島高四郎「井原の歩み」)

発起人は、山本吉五郎、生田柳松、大木清蔵、中島貞三郎、中島伸吉、中島宮五郎、山口義助、山口福平、田中茂三郎、服部亀吉の10人。加入金1戸当り1円。豊橋町東田村の東田総代区18組に所属した。

氏神は、今と同じ東田神明宮 (田中の神社) で祭礼にも加わった。その他の行事はすべて東田区に属して参加した。

子どもたちは、豊岡村岩田尋常高等小学校に通った。明治、大正時代は義務教育である小学校6年を卒業すると、大部分の女子は町の製糸工場へ女工として住込みで就職した。

農民たちは、百姓仕事と正月に女工として娘たちが稼いでくる給料で生計を立てていた。女工の給料は普通の働きで40円か50円、腕の良い者は90円ほどであったといわれている。

男子は家事を手伝うか、大工、左官、商人などの徒弟奉公に出た。5年の年季奉公をして技術を身に付け、年季明けに1年間のお礼奉公をした。奉公中は無報酬で、盆、正月に若干の小遣いが手渡されるだけであった。

村の行事に庚申様のお祭りがあって、祭り

の日は当番の家に神具や膳碗などを運び、午前中に料理をした。正午には近所の子もたちを接待し大変喜ばれた。料理は米のご飯と味噌汁、ひりょうずなどだったが、当時はたいへんなご馳走だった。

大人たちは、日暮れ時に当番の家に集まって庚申様の掛け軸を飾り、庚申鏡をうち、珠数を回しつつ「ナナム ボンテン タイシャク ショウメイ コンゴドウシ」と唱和。終わったら1升の酒と米のご飯、味噌汁、ひりょうず、なますのご馳走で宴会をした。家族に食べさせようとひりょうずを土産に持ち帰る者もいた。他にも秋葉講、伊勢講、お日待講などが年に数回あり、村人の楽しみであった。

特に、秋葉講と伊勢講は順番で旅費と宿賃が村から支給され、代参が行われた。伊勢神宮代参のお土産は家庭配布用のお札、五幣をかたどった生姜糖や竹の笛だった。子どもたちが竹笛をピーヒョロピーヒョロ鳴らすと伊勢参りに行ったことが分かったくらいで、必ずお土産に買ってきたものだった。

北岩田一区 明治、大正時代は、東は旧伝馬街道を境として、南は北岩田二区（今の平川本町）多米、岩崎街道、北は多米西端の橋より朝倉川を境とし、西は変電所付近と接する広い区域をなしていた。

昭和初期に、幻の競馬場とも言われている競馬場のスタンドの後ろ辺りに移住してきたうどん屋（東光町）も加入して、井原町、東田町字井原、平川町、東光町の4町で北岩田一区が構成された。

東田町字井原は土地区画整理事業が計画されたが、第二次世界大戦により中止され未実施となっている。そのため戦後も東田という名が残り、今の東田町字井原にいたっている。田園地帯であったので、平川町、東光町辺りでもタニシやドジョウが獲れた。

明治末期に10戸で出発した井原村が、現在

は800戸から900戸といわれる大所帯の北岩田一区となった。市電の電停が3か所もでき、今のように発展するとは誰も予想できなかったことだろう。

北岩田一区の唯一の財産である井原公民館は、平川町32番地に建っている。軽量鉄骨平屋建て、土地87.17坪、建坪45坪で、昭和46年（1971）10月完工の3代目である。

平成17年（2005）に公民館の前に防災倉庫を設けて災害に備えた。また、床面及び外壁の塗装を行って、台風や大雨などの災害に耐えることができるよう補強工事を行った。



スダジイの木（平川神明宮の杜）

岩田運動公園に隣接する東の一角に平川神明宮の杜がある。豊かな木々の緑は、季を通じて訪れる人々の心身を優しく癒してくれる。社殿と公園内の水神池とを結ぶ一点に、豊橋の「巨木・名木百選」の一つ『スダジイ』が根を盛り上げ枝々を広げ、天に向かって昇るかのようにそびえている。根元にたたずみ空を見上げると悠久の時間が、ゆっくりと流れるような想いを抱かせてくれる。この巨木は、幹周り423cm。高さ19.5m。枝張り22.6m×22.2m。推定樹齢300年以上を有し、豊橋市のスダジイの中では太く、もっとも高いとされている。

2 開けゆく岩田

(1) 岩田第一土地区画整理事業

戦後の豊橋 第2次世界大戦によって豊橋市も市街地の大半が焦土と化し、復興に9か年もの歳月を要した。豊橋市の戦災復興計画は、昭和29年（1954）に一応の完成を見る。

これ以後、豊橋市は、産業・文化の調和の取れた豊かな都市づくりを目指して、新たな発展を遂げた。戦災と復興のために一時中断していた東部台地への進出は、この時点を契機に、より広いより新しい視点に立った方策のもとで、新たな展開を見せ始めていた。特に、軍用地の解放にともなう東部地区および南部地区の発展はめざましいものがあった。

こうした状況下、昭和27年（1952）には、平川土地区画整理事業が着手され、昭和34年（1959）完了している。

当時の豊岡地区の大半はまだ純然たる農村の景観を呈していた。水田と果樹園の広がりの中に、数戸ずつの農家が点在し、その間を曲がりくねった農道が連絡しあっていた。

東方には弓張山系が北から南になだらかに連なり、そのふもとから山中川と朝倉川が西に流れ、青く澄んだ溜池が点在した、静かで緑濃い優良な営農地域であった。

昭和40年代に入って日本経済は飛躍的に成長し、全国的な規模で都市化が進んだ。豊橋も例外ではなく、岩田を中心に豊岡地区にも市街化の波が押し寄せてきた。

土地区画整理事業の発端 豊川の上流、宇連ダムを基点として、渥美半島の先端に向かう豊川用水事業の完成が間近かとなった昭和38年（1963）、愛知県議会議員田中積三は豊川用水受益地の受入れ事業として、岩田川灌排水事業の施行を地域農業関係者に呼びかけた。関係者の再三協議の結果、水路の潰地は、土地区画整理事業の換地によって償うことを条

件としてこれを受入れ、合計160haを受益地とする岩田川灌排水事業の施行を決定。昭和40年度より工期3か年で完成をみた。

また、東三河総合開発計画が具体化し、三河港を囲む臨海工業地域の開発が現実のものとなってきた。緑多き岩田の地は住宅の適地として世人の注視するところとなった。岩田地区の適正な土地利用の推進、災害防止・交通・衛生・保健など健全な環境を有する新たな郊外住宅地の造成を目的とする土地区画整理事業は時代の要請でもあった。

昭和41年（1966）水田地帯を含む約230haを区域とする岩田土地区画整理事業準備委員会が結成され岩田第一、岩田第二、岩田第三（平川本町）の土地区画整理事業が施行されることとなった。（「とよおか誌」）

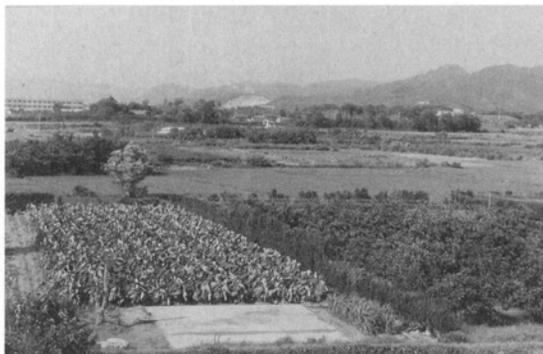
岩田第一土地区画整理事業 岩田第一土地区画整理組合の事業は、昭和43年（1968）から昭和51年（1976）までの7年余の歳月を経て完工の運びとなった。現在の豊小学校区を成している地域である。新町名は西岩田一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、六丁目と名づけられ、整然と区画された住宅地域ができ上がった。岩田第一土地区画整理事業は、組合施行という地域住民自身の手による都市づくりという点で大きな特色を持っていた。

各種インフラの整備、町づくりは言うに及ばず、組合事業としては、初めての小学校用地（現豊橋市立豊小学校）の確保や地区市民館の建設などがなされた。施行当時の戸数は僅か84戸に過ぎなかったが、事業が完了した時点では、実に580戸の多きを数えた。

(2) 岩田第二土地区画整理事業

大規模な開発 岩田第二土地区画整理事業は、豊橋渥美都市計画事業の一環で昭和46年（1971）に組合を設立した。昭和58年（1983）の完成まで12年の歳月を要した豊橋市内で最

も大規模な面積を有する土地区画整理事業のひとつであった。



豊岡中学校を望む昭和40年代半ばの岩田



豊岡中学校を望む昭和50年代半ばの岩田

豊橋中心部から国道1号線を二川方面へ約2.5km、さらに東へ約1kmほど入ったところに開けた農業地帯の岩田地区は、昭和30年代の合併前は、岩田町として飯村、岩崎を含む地域だった。

東部の静岡県境に延びる弓張山系から流れ出す湧水を蓄える農業用ため池を使った水田耕作と畑作地帯だったが、合併後は、岩田町、飯村町、岩崎町に地名変更され、このうち岩田町の約111.7haの区画整理が、岩田第二土地区画整理事業であった。

入り組んだ農地を碁盤目状に区画整理、区画ごとに中岩田一丁目から六丁目、東岩田一丁目から四丁目と岩田町、岩田町字北郷中、飯村町字本郷が新しい地番を付けて生まれ変わった。区画整理前は、道路も農道が中心で複雑だったが、整理後は東西南北に真っ直ぐに走る街区となった。中岩田三丁目と六丁目

にかけて東西に横たわっていた大きな楕円形の農業用ため池「岩鼻池」も、埋め立てられた。

ため池の東部に当たる中岩田六丁目には、県営岩田団地が昭和47年（1972）から3か年計画で建設され、16棟650戸が完成、昭和50年（1975）には600世帯1,888人（昭和50年国勢調査）が、この近代的な都市型住宅に移り住んだ。

区画整理事業で真っ直ぐに整備された道路の両側には、電柱が規則的に建ち並んだ。しかし、豊橋東部の農業の中心地でもあったため、宅地化されたといっても、まだ、野菜が栽培されていたり、栗、柿、梅の苗木が植えられていたりして、一戸建ての住宅は少なく県営岩田団地の建物が一際目立っていた。

区画整理地の北部地域は、多米方面へ通じる旧多米街道沿いに岩田八幡宮を中心にして従来からの農家の屋敷と豊岡中学校、岩田小学校があり、まだ、農業地帯の面影をとどめていた。昭和50年（1975）の国勢調査では、岩田校区は4,063世帯、14,361人が生活していた。岩田第二土地区画整理事業の進展に従って多くの住宅用地が供給されたことと昭和48年（1973）暮れの第1次オイルショック前の住宅建設ブームが、相乗効果となって豊橋の新興住宅地に変貌した。

整然とした町並み 整然と区画整理され、上下水道等のインフラが整備された住宅用地になったことと豊橋の中心部へ車で数十分の距離という交通の便にも恵まれていたことから、次々に新しい住宅が建設された。

同時に喫茶店をはじめとする飲食店や地元スーパーマーケットも進出して住民生活を豊かにした。生活の安全を見守る豊橋消防署東分署は、昭和53年（1978）4月1日に開設された。東分署は岩田地区の住民増加に伴って昭和56年と平成9年には建物を増築。施設、設備の充実がはかられた。

できたばかりの住宅や県営岩田団地に移り住んできた20代、30代の若い世代の家族が増えるにつれて岩田小学校、豊岡中学校は、児童生徒数が急増して大規模校になった。

このため、豊岡中学校は校区変更を行い、昭和57年（1982）4月1日に東部中学校、昭和63年（1988）4月1日に東陽中学校を新設して2回にわたって分離された。新設高校の豊丘高校は、昭和38年（1963）に岩田校区西に隣接して開校。小学校、中学校、高校までの教育環境も整った。

外国人労働者 時代は昭和から平成に変わった。豊橋は、平成に入って間もなくのバブル経済崩壊後、県下でも南米日系人が多い都市になった。豊橋東部から静岡県湖西市にかけて広がる工場地帯、豊橋南部から田原市の臨海部に広がる工場地帯があり、工場で働く労働者供給の都市でもあるからだ。

バブル崩壊を前に東南アジア、中国へ工場を移転する国内産業空洞化の加速と同時に国内に残された工場では、発展途上国の低賃金で生産される工業品との競争に勝ち抜くために労働者の賃金が抑えられた。

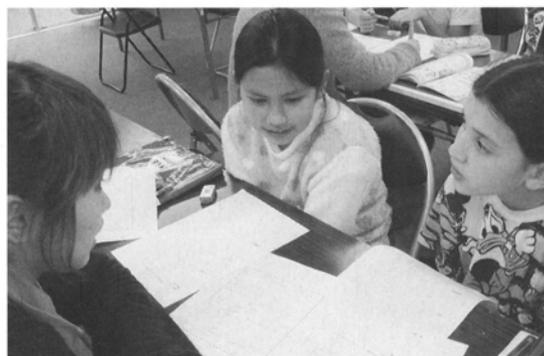
同時に日本は戦後の長期にわたる成長で外国人労働者にとっては、最高の出稼ぎ国となっていたことと、低賃金でも母国より、はるかに高い給料を稼ぐことができると来日者が急増した。特に、日本人移民の子孫が多い南米のブラジル、ペルーなどからの外国人が増え、豊橋周辺の工場地帯に働く場所を求めた。

岩田地区は、東に東三河環状線が整備され、二川バイパスを通過して豊橋東部から湖西市方面の工場、あるいは南部臨海地域の工場地帯への通勤に便利なことと建設から年数を経て家賃が比較的安くなった県営岩田団地に南米日系人が多く入居するようになった。

商店街にも変化が生まれた。南米のブラジルやペルーの食材を販売する店、格安の衣類

を扱う店、ブラジル料理の店などが相次いで開店した。もともと陽気で家族、仲間が集まってパーティーを開き、リズミカルな音楽に合わせてダンスを踊るのが好きなブラジルやペルーの人たちは、昼夜の別なく集まっては騒ぐことから県営岩田団地住民、周辺住民からの苦情の対象になった。

車の駐車の方法、豊橋では早くから始まったごみ分別収集でのトラブルなどが、外国人にとって「馴染めない都市」のイメージが生まれた。しかし、トラブルのたびに言葉の違い、習慣の違いを認め合い、我慢強くお互いが歩み寄ったことで多くのトラブルは影をひそめるまでになった。



大学生より日本語を習うブラジルの子どもたち

同時に子どもたちが通う学校では、日本語教室を開いて学習成果が上がる努力を続けた。

県営岩田団地内では、大学生ボランティアによる学習支援が始まったり、日本語も上手な外国人が、母国語を忘れないようにとポルトガル語の教室を開くなど、外国で暮らす南米日系人子弟を支えている。

(3) 平川本町土地区画整理事業

用水を確保 平川本町は寛文年間（1661～1673）より、半世紀以上の長きにわたり、「水と土と人」との戦いの末、20数万㎡の美田を開拓した。新田の水源として、弓張山系の麓に利兵池を築造、続いて平川に水神池、新池（空池）を造って用水の確保を図った。幾

多くの困難を克服し、平川新田開拓の大事業が成し遂げられ、豊かな農村地帯が誕生した。

以来、農村地帯として栄えたが、昭和30年代より都市化の波が平川地区にも急速に押し寄せてきた。この流れに逆らうことは地域の発展に支障をきたすことになる。

町民の創意で これを憂慮し、昭和44年(1969)1月、田畑、水神池、新池(空池)を含め、総面積41.82haにわたる土地の区画整理を町民の総意で決定した。

昭和48年(1973)12月、愛知県知事の認可を得て、組合員163名をもって平川本町土地区画整理組合を結成し、地域開発に着手。水田地帯を埋め立てて整地。次いで、大きな雨水管渠5本を区画道路に埋設し、朝倉川へ放流し排水の完璧を図った。

区画内の道路は快適な住宅地を目標に、幅広い道路を多く採用。道路は全面舗装し、上下水道を完備。都市ガスの布設工事を行った。

また、地域住民の福祉とコミュニティー活動の場としての平川本町住民会館を建設。

さらに、岩田運動公園の実現のために、用地13万8千 m^2 の内、11万3千 m^2 の確保に多大の努力を払い、立派な運動公園の建設に貢献した。かくて、組合設立以来、満8か年と総事業費12億円余に及ぶ平川本町土地区画整理事業が完成した。

(4) 平川南部土地区画整理事業

閑静な住宅地に 昭和37年(1962)8月に愛知県知事の許可を得て、岩田町字宮下、字中ノ坪、字池下、字畑割、字西大田、字東大田、字野添地域25.69haの土地区画整理事業が、昭和38年(1963)から43年(1968)までの6か年かけて行われた。

昭和38年(1963)4月開校された愛知県立豊丘高等学校の用地も、この土地区画整理事業により確保された。

平川南部土地区画整理事業によって造成された岩田校区の平川南町、豊岡町、平川町、豊校区の春日二丁目、仲ノ町、東田校区の朝丘町、宮下町は、閑静な住宅地域に生まれ変わった。

開け行く台地 これまで述べてきたように年代こそ異なるが、岩田第一土地区画整理事業、岩田第二土地区画整理事業、多米土地区画整理事業、平川本町土地区画整理事業、平川南部土地区画整理事業は、いずれも岩田を舞台として繰り広げられた。この間、この地域は大きく変化し発展を遂げてきた。

岩田の躍進は、これらの区画整理事業を抜きにして語ることはできない。のどかな田園地帯は、インフラの整備された快適な住空間へと見事に変貌を遂げた。

下記に示した地図は、岩田第一、岩田第二、平川本町の土地区画整理図である。

岩田の発展の礎は、将に整った。



岩田第1・岩田第2・平川本町土地区画整理事業図

(5) 多米土地区画整理事業

土地区画整理事業 朝倉川を改修するとともに、多米地内の都市計画道路を整備し、豊かな住宅地を造成することを目的として、昭和44年(1969)に整理事業が始まった。完工までに、実に16年もの歳月を要した県下最大級

の組合による土地区画整理事業であった。

地区の横顔 多米地区は、北側山麓に集落を有し、南面へ緩やかに下がった辺りに、水田を有する農耕地帯であった。

一級河川、朝倉川が東西に貫流しているが、人々が生活するのに必要な道路は狭く少なかった。また、農道も効率的ではなかった。東西に走る主要地方道、豊橋・大知波線が地区内の唯一の幹線道路という状況であった。



土地区画整理前の多米（航空写真）

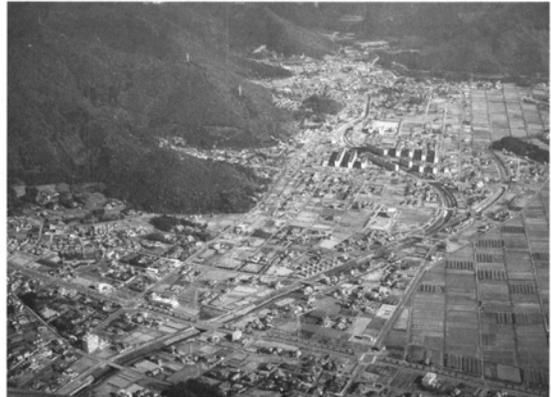
昭和36年（1961）、多米地内で豊川用水東部幹線水路の用地買収が、開始されることになった。この用水路は、開渠で幅も大変広く、地区を二つに分けるように横断するというものである。この頃、既にこの地区でも経済の高度成長の影響を受け兼業農家の増加が進行していた。農業は急速に陰りを見せ、将来を農業にかける魅力に乏しく、脱農業へと動き始めていた。

昭和38年（1963）には、東三河工業整備特別地域に組み込まれ、地区を貫く主要地方道の豊橋・大知波線の改良、拡幅工事の用地買収が始まった。地域は変わりつつあった。

夢を広げる 昭和38年（1963）、町総代を中心とする地域開発研究会が設けられ、都市的整備の検討が幾度も重ねられた。その中心テーマが土地区画整理事業であった。昭和40年（1965）、住民アンケートが実施され、地権者の9割までが、地区の宅地化に賛成であること

が判明した。こうして、多米地区の大部分と岩田町の朝倉川に沿う地域を対象に、多米土地区画整理事業が昭和44年（1969）に施行された。

整備対象地積は156.69ha、施行後の宅地面積1,044,754㎡、世帯数4,179戸、人口は16,716人と積算された。



土地区画整理後の多米（航空写真）

新しい町 岩田で対象となった区域は、岩田町字（向田・八反田・居村・境坪・皆元・ヒカイ）及び東田町字井原の一部であった。

工事中には多くの困難にも見舞われた。とりわけ七夕豪雨と呼ばれた昭和49年の集中豪雨の被害は著しく、施工途中の橋梁や宅地の流失など多大な被害を被った。「オイル・ショックによる建設資材の高騰」「テレビ電波障害」等々多くの問題もあったが、土地区画整理事業は、昭和60年（1985）に完成した。

地区は一変した。道路が整備され、上下水道が完備され、大小さまざまな公園が点在し、改修成った一級河川朝倉川には、近代的な装いが施された橋が10か所架けられた。

豊かな緑を有する住みよい居住環境が約束された町、毎日の生活が生き生きと営める町へと見事に変貌した。

（6）農業の移りかわり

その昔 岩田地区のほとんどの家が農業で生計を支える専業農家であった。6月、7月の田植え、10月、11月の収穫期は、特に忙しく、

老いも若きも、子どもの手までも借りて一家総出で働いた。だが、生活は必ずしも豊かではなかった。米・麦・さつま芋などを作りながら、果樹栽培を行う農家もあった。

雨天の日や夜などには、縄をない草履づくりなどの藁細工をして暮らすこともあった。



昔の麦刈りの様子

戦後の農業 農地解放が行われ、農家に大きな変化がもたらされた。地主、小作人という身分関係がなくなり誰もが自作農として、農業に従事できる時代になった。

戦後の間もない頃は、日本の社会全体が食料不足の苦しい時期であった。この時期は農業従事者が、比較的潤った時代であったといわれている。時代が進むにつれ、日本は工業立国へと大きく舵を切り、社会も急速に変化した。高度成長の名の下、経済は大きく発展した。地方の若者の多くは、都会に憧れ豊かさを求めて旅立って行った。岩田地区も例外ではなかった。こうした時代の風をうけながらも岩田の農業は、細々と続けられていた。

工業化の波は農作業にも影響を与えた。農業の機械化である。岩田地区においても様々な農機具が農家に届くようになった。

米作りも変化した。田植えも手植えから機械植えへ、また、田畑を耕運機が駆け巡り農地を耕すようになった。

失われる農地 広々とした田、畑、原野が続く民家がところどころに点在していた田園地帯岩田も、昭和40年代頃から大きな転換期を迎え、新しい時代に向かって動き始めた。

昭和43年（1968）から始まった岩田第一土地区画整理事業、昭和46年（1971）開始の岩田第二土地区画整理事業、昭和48年（1973）開始の平川本町土地区画整理事業により、岩田地内の土地の多くが宅地化され農地は極めて少なくなった。

岩田地区の農地は土地改良事業により整備され196haまで減少した。昭和51年（1976）に岩崎、葦毛の地区が岩田から切り離され、隣接する多米地区に編入されるに至って、農地は、田428,077㎡。畑55,305㎡までに減少してしまった。



大型機械による田植えのようす

農家の担い手 日本の経済が発展するにしたがって、若者たちは都市生活者の道をえらぶようになり、農家の後継者も他の職業に就くようになった。米作り中心の小規模な岩田の農業には、自ずと限界が見えてきた。

農家は効率的な農業経営に目をむけ、米づくり中心の農業からビニールハウスや温室による園芸作物の栽培などを取り入れ、時代にあった農業への転換を図った。

養蚕 かつて、「糸のまち」として栄えた豊橋も戦後は衰退の一途をたどり、今やその面影すら残っていない。岩田地区においても、戦後の一時期には養蚕で生計を立てる農家も少なくなかった。桑畑もあちこちに見られたが製糸業の衰退と共に完全に姿を消した。

養鶏・養豚 養豚は昭和30年代から40年代にかけて、盛んに行われた。飼料となるさつま

芋の生産が、盛んであったのも一因として挙げられる。だが、土地区画整理後、養豚場・養鶏場の周辺の住宅化が進むにつれて減少し、養鶏・養豚農家はほとんど見られなくなった。今は井原町にわずかに養鶏場が残る程度である。

いちご栽培 昭和30年（1955）頃から栽培が始められ昭和33年～34年には栽培農家も50戸を数えた。栽培方法も露地栽培からビニールハウス栽培へ、さらに、昭和49年（1974）頃になるとパイプハウス栽培へと移行した。

栽培する品種も多種多様となり、一年を通じて、市場に出荷できるようになった。しかし、イチゴ栽培に携わる農家の後継者は、都市化の波を受けて育たず年々減少した。現在では、10戸程度の農家が営む程度で、先行きが心配されている。



パイプハウスのいちご栽培

大葉づくり 校区東部の環状線の東に広がるほ場の中に、大葉（青ジソの若葉）を育成する大型のいくつかの温室がある。室内に蛍光灯を灯し、日照時間を調整することによって、一年中収穫できるように工夫されている。大葉は、天ぷら、さしみの添えものに使われるなど用途も広く、需要もますます伸びている。

観葉植物栽培 昭和30年（1955）頃、豊橋でランなどの観葉植物の栽培が始められた。時代を先取りし、いち早く温室による栽培を取り入れた先駆的農家が岩田に2戸あった。2戸の農家は現在も栽培を続けている。



温室での大葉づくり



温室での洋ランの栽培

岐路に立つ 土地区画整理によって、著しく耕地面積を減らした岩田の農業は、次代を担う後継者の問題を含めて大きな岐路に立っている。今こそ、新しい施策が求められている。

3 活動する岩田

(1) 校区総代会

人口17,000人、6,600世帯が、9つの町内会に分かれて活動をしている。

地域住民が安全で安心して暮らせる地域づくりを目指して、青色パトロール隊、子ども見まもり隊による地域パトロールや交通安全の啓発活動、防災訓練など、各種団体と協力して取り組んでいる。



青色パトロール隊出発式



(2) 社会教育委員会

地域の文化活動、生涯学習活動、趣味のサークル活動の発表の場として、校区文化祭が盛大に行われる。毎年、行う成人式も100人以上の参加者でにぎわう恒例の行事の一つとなっている。



岩田小学校での成人式



(3) 社会体育委員会

校区体育祭をはじめソフトボール、ソフトバレーボール、キンボール、インディアカ、フットサル、ボーリングなどの行事を行い、地域のレクリエーションスポーツの振興と住民の交流を活発に行っている。



キンボール大会（岩田小学校体育館）



パン食い競争と玉入れ（校区体育祭）

(4) 子ども会育成委員会

幼稚園・保育園の年長組から小学6年生までの約1,300人の子どもたちを対象に活動。夏休みのラジオ体操、ソフトボール、フット

ベースボール大会、クリスマス会、節分会など、地域を挙げてさまざまな活動に取り組み成果をあげている。



ソフトボール大会



夏休みの朝のラジオ体操

(5) 防犯委員会

校区内の安全・安心を合言葉に豊橋市防犯協会と協力してパトロール活動や啓発活動を行っている。



防犯パトロール隊の活動

(6) 清掃指導委員会

ごみステーションの適正管理、ごみ分別の指導、廃棄物の不法投棄監視や530運動に取り組んでいる。



平成18年度朝倉川 530運動の様子

(7) 更生保護女性会

社会を明るくする運動の取り組みや各種施設への慰問活動を行っている。また、青色パトロール隊と協力して校区内のパトロールを行っている。



更生保護女性会の防犯パトロール

(8) 消防団岩田分団

火災出動をはじめ火災予防週間や年末夜警などで防火・防災のPR活動などを積極的に行っている。



年末に夜警を行う消防団員を激励

岩田分団が所属する第2方面隊は、岩田、豊、多米、飯村、岩西、つつじが丘、東田、

旭、牛川、鷹丘、下条の11の校区で構成されている。

消防団員がそれぞれの町内から選ばれ第2方面隊岩田分団を形成している。第2方面隊での「小型ポンプ操法大会」では数多くの優勝があり、市の大会でも優秀な成績を収めている。



消防団員がそれぞれの町内から選ばれ第2方面隊岩田分団を形成している。第2方面隊での「小型ポンプ操法大会」では数多くの優勝があり、市の大会でも優秀な成績を収めている。

(9) 校区老人会連合会

校区内で生活している65歳以上の人は2,000人を超え高齢者は年々増加の傾向にある。



敬老会の楽しいひと時



老人会グラウンドゴルフ部のお花見の会

校区老人会連合会はバス旅行、グラウンドゴルフ、ゲートボール、カラオケ、囲碁・将棋などの行事を活発に行っている。

また、高齢者が一人ぼっちにならないように「一声運動」や「友愛訪問」などの活動に力を入れている。

(10) 民生・児童委員会

高齢者、障害者（児）の訪問活動と相談や支援活動を実施。また、青少年の健やかな成長を支援する健全育成活動にも力を注いでいる。

一人暮らしの高齢者に対しては「見守りボランティア活動」を行うなど、地域に根ざした活動を活発に展開している。



名札付けをする民生・児童委員

(11) 岩田校区市民館

生涯学習の場として盛んに利用されている。カラオケ、踊り、詩吟、絵手紙など、趣味を生かした講座が開講され多くの人たちが学んでいる。

各種団体、サークルやクラブの会議や会合の場、発表の場としても活用されている。

図書室は、子どもたちの学習の場、読書の場として授業後大いにぎわっている。

岩田校区市民館は豊橋市の中でもトップクラスの利用状況を誇っている。



文化祭での絵手紙の展示



文化祭での出しもの



文化祭の展示品を見る人たち（岩田校区市民館）

4 伸びゆく岩田

(1) 中岩田の町並み

中岩田の名はいつから 岩田校区に中岩田の地名が設定されたのは、昭和50年（1975）9月26日。岩田町字西郷中、及び東太田の一部が区画整理によって、中岩田一丁目と改められたのが、その始めである。

区画整理事業は昭和45年（1970）に始まり、昭和53年（1978）に完了した。岩田第二土地区画整理事業と名づけられた大きな事業であった。

主な事業は豊岡中学校と岩田小学校の東南区域にある水田と岩鼻池等の埋め立て造成工事であった。区画整理によって造成した土地には東西南北に道路を走らせ、商業地や住宅地としての快適な環境を整えた。

工事期間中の昭和49年（1974）頃から、ぼつぼつ家が建ち始めた。そして、600戸の岩田県営団地が、まず完成。

昭和57年（1982）2月20日には中岩田一丁目から六丁目までの地名に変更された。（中岩田に変更した旧地名は、東太田の一部、池南、郷前、中郷中、西郷中、五反田、切替、上岩鼻、下岩鼻、岩鼻池等である）

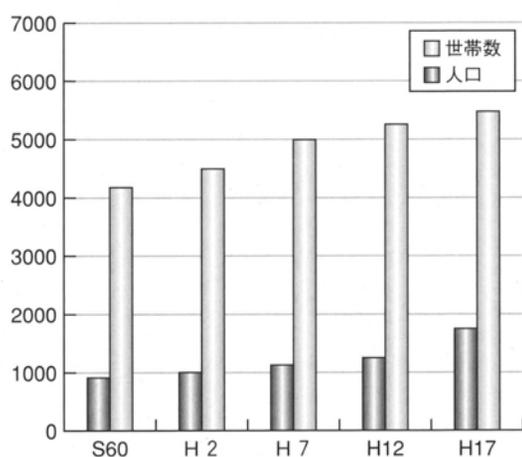
家が建ち始めた昭和49年（1974）頃は、まだ下水道が完成していなかったが、区画整理の完成と共に遂次完成、その後、住宅もどんどん建った。旧西郷中一带は風致地区に指定されていた。屋敷周辺には大木が立ち並び、緑豊かな地域であったが、区画整理が進み新しい家が建築されるとともに木々が伐採され緑樹の豊かな景観は失われていった。

昭和60年（1985）には中岩田の世帯数は1,362世帯に増加。人口は男子2,336人、女子は2,488人、男女合わせて4,824人までに増えた。男子1,074人、女子1,135人、合計2,209人を有する県営岩田団地（中岩田地区の人口の

約45%) によることが大きく、中岩田地区の人口を一気に押し上げる要因となった。

平成7年(1995)の世帯数は1,785世帯、人口は男子2,706人、女子2,902人、合計5,608人。昭和61年から10年間の人口の伸び率は、世帯数が31%、人口は16%の伸びであった。これは主として、岩田団地以外の一丁目から五丁目までの人口増である。

平成17年(2005)は、2,376世帯、人口は、男子2,996人、女子3,197人、合計6,193人となった。



中岩田一丁目から六丁目の人口及び世帯数推移
(豊橋市役所行政課統計資料より作成)

一戸建て住宅が建ち始めると、家電店などの商業施設、信用金庫、各種商店、飲食店、喫茶店などが運動公園通りなどの広い道路に面して続々と開店した。

また、豊岡中学校前の交差点から南に向か



豊岡中学校前の交差点あたりの中岩田1丁目付近から南を望む

う道路沿いにも各種の店舗が立ち並び、わざわざ町の中心部まで行かなくても、欲しい物を買うことができ、たいへん便利になった。

岩田団地と豊橋駅間の路線バスも開通し住宅地としての環境が整った。中岩田地区を閑静な住宅地として整備する土地区画整理事業の目的も達成されつつあった。

中岩田の町 田尻村開村以来の住民が住む古き伝統を持つ旧郷中と土地区画整理事業にともなって移住してきた新しい住民とが共生する岩田地区は、南岩田町内会(一丁目から五丁目)と岩田団地町内会(中岩田六丁目)の二つの町内会が自治会活動を行っていた。当時の町内会役員に課せられた命題は、新旧住民の融和共生であった。

昭和57年(1982)2月2日に南岩田町内会が中岩田町内会と東岩田町内会に分かれた。さらに昭和62年(1987)には、中岩田一丁目から五丁目の人口の増加にともない中岩田一区(中岩田一丁目と四丁目)、中岩田二区(中岩田二丁目と五丁目)、中岩田三区(中岩田三丁目)とに分かれた。以来、それぞれの町内会が活発に活動を展開し、現在に至っている。

中岩田地区は、岩田校区内のほぼ中央に位置する岩田小学校(中岩田四丁目1-2)、岩田運動公園(岩田町1-2)の南側から、南の端は飯村町を挟んで流れる山中川まで。

西側は西岩田町(豊校区)と南北に走る岩田運動公園通りを挟んで東側までと、岩田校区全体から見ると、ほぼ南西の地域に位置している。

中岩田一区は、少し高台にあり古くから開けた土地であった。住宅地の中に源立寺、岩田八幡宮、琴平神社が建っている。また、歴史と伝統を誇る岩田小学校、住民の熱意によって氏神様である岩田八幡宮を移転してまでも建てられた豊岡中学校、岩田保育園等が点在する暮らしやすい閑静な住宅街である。



中岩田一区の町並み

中岩田二区へは、昭和53年（1978）4月1日に市内瓦町84にあった豊橋市消防署東出張所が東分署に昇格して現在の所へ移転。（中岩田二丁目7-4）、火災、防災、救急出動の拠点として市民の安全を守っている。平成16年度の東分署の火災、救急出動数は2,280回を数えた。

中岩田の憩いの施設 東部老人会館は、学習の場、練習の場、憩いの場、各種サークルの集いの場として、多くの人々によって活用されている。老人会の人たちが、囲碁、将棋などを楽しむ場としても利用されている。この東部老人会館は岩田第二土地区画整理事業完工記念として、昭和58年（1983）1月に完成。運営は、東部老人会館運営委員会によって行われている。昭和58年（1983）4月には、1階部分が豊橋市社会福祉協議会に無償で貸し出され、管理、運営されることになった。平成7年（1995）3月、1階部分107.60㎡が社会福祉協議会によって増設され、合計556.42㎡となり部屋数も増え、より幅広くサークル活動ができるようになった。2階部分の179.82㎡は中岩田二区と三区の集会場とすることが了承されており子ども会、町内会の催し事、会合に大いに利用されている。

琴平神社境内の一角に参集殿がある。この建物は岩田第二土地区画整理事業の一環とし

て建てられたもので、整理事業実施中は整理組合の事務所として使用され、完了後は岩田住民会館として、町内会をはじめとする地域住民のための施設として利用されている

また、教室は一般の人々にも貸出しもされており、文化活動の場として、あるいは、空手などの修練の場としても使われている。



東部老人会館全景



参集殿（旧岩田第二土地区画整理組合事務所）

中岩田の公園 中岩田には旧地名を使った公園が3か所ある。中郷中公園（中岩田四丁目10）、五反田公園（中岩田二丁目10）、そして、岩鼻公園（中岩田三丁目18）である。

植樹された木も、今では10数メートルにもなり緑豊かな公園となっている。盆踊り大会、ゲートボールの練習、また、住民の憩いの場として、大いに利用されている。



岩鼻公園（中岩田三丁目18）



五反田公園（中岩田二丁目10）

岩田運動公園 岩田運動公園が都市計画公園として決定されたのは、戦前の昭和11年（1936）である。

昭和48年（1973）12月に平川本町土地区画整理事業を住民が総意で決定し、区画整理事業が開始されると岩田運動公園の整備計画も本格的に始動した。

岩田運動公園は、総面積13.80haと広大な土地に野球場、球技場、庭球場、クラブハウス等の体育の施設を備えている。市民自らが体育の振興とレクリエーション活動やスポーツを楽しむ運動公園に、また、散策を楽しんだり静かな時間を過ごしたりすることのできる静と動を合わせ持つ総合的な公園を目指すという計画であった。

水神池を含む静の部分の公園5.5haには桜、柳、アジサイが植えられ、桜やアジサイの名所として、市民に親しまれている。

水神池の周囲での散策、ジョギング等の楽しみの他に、年に一度だけの楽しみがある。

それは、元旦の7時20分過ぎに神石山の山頂に現れる太陽である。



水神池より初日の出の見える神石山を望む

雲一つ無い青空に少しずつ明るさを増しながら現れる年。たなびく雲の間から幾つもの光の筋とともに現れる年。様々な表情を見せながら現れる初日の出。暖かい光が水面を渡り、私たちの体を包んだ時の心の安らぎ、自然と手が合わさる。この公園の隠れた名所スポットの一つである。

球技場 豊橋市民球場が昭和55年（1980）6月1日に開場した。敷地面積20,543m²、建物延面積5,005.68m²の広さを持ち、両翼93m、センター115m。屋内ブルペン、ロッカー室、ダッグアウト、本部室、医務室、放送室等々を備え持つ立派な野球場である。観覧席は約16,000人を収容。事業費76,300万円をかけて完成させた。

平成12年（2000）4月～平成14年（2002）4月には61,642万円をかけて改修。プロ野球の公式戦も開催できるようになった。

昭和56年（1981）4月1日には鉄筋コンクリート2階建、建物延面積506.46m²のクラブハウスが造られた。同年5月には敷地面積、5,340m²でコート6面（全天候）、ナイター照明6基、観覧席500人収容の硬式庭球場がオープンした。



豊橋市民球場グラウンドの風景

ラグビー場兼サッカー場は昭和57年（1982）に完成。敷地面積15.311㎡、建物延面積692.90㎡で役員室、審判員室、ロッカー室、放送室、器具室などの施設を備えている。観覧席はメインスタンドが2,500人、バックスタンドには1,500人が収容できる。

これら施設の利用者は年間6万人～8万人台でスポーツ活動の重要な拠点となっている。

（2）県営岩田団地

人気の団地 県営岩田団地は、昭和49年度に16棟670戸が完成した。間取りは3K、3DK、4DKで当時の公営住宅としては、内容の充実した近代的住宅であった。当然、家賃も高く一番高い4DKでは月額36,900円。低い家賃は17,700円である。主な3K、3DKの家賃は26,000円から28,000円であった。



県営岩田団地

豊橋の中心市街地から車で数十分の距離、上下水道完備で都市型の県営岩田団地は、高

度成長が続く中で核家族化も進行していた時代に建設されたため人気が高く、完成と同時に多くの入居者で満室になった。しかし、平成に入って間もなく国内経済がバブル崩壊でものづくり産業が、中国、東南アジアへ工場を移転、産業構造改革の進展が進むにつれて国内でものづくりを続ける企業の雇用形態が大きく変化し、外国人労働者が進出した。

外国人との共生 外国人労働者は、南米日系人や中国、アジアからの出稼ぎ労働者が中心。そのうち、南米日系人の労働者が、岩田団地でも生活するようになった。



仲よくもちつきをする日本とブラジルの子どもたち

平成の時代に入って、岩田団地も建設から20年以上が過ぎ、当時は高かった家賃が他の公営住宅より安く、民間と比べても割安だったことも外国人労働者にとって生活しやすく、人気を集めた。

また、県下のものづくり企業のうち、自動車産業関連事業所が、二川地区の豊橋東部から静岡県湖西市の周辺に集中しており、これらの事業所で働く外国人労働者にとって通勤に便利だったこともある。

外国人入居者の増加で外国人との生活習慣の違いから、団地内でのトラブルが増加した。しかし、団地住民と団地自治会は「言葉や習慣の違いを認め合い、同じ住人として助け合って行こう」と交流に力を入れ出した。団地の岩田六区自治会では、平成16年（2004）の

夏に第1回「納涼まつり」を開いた。団地広場の屋台には、ブラジル式バーベキュー「エスペティーニョ」などが並んだ。住民同士として一緒に祭りを主催することで交流が深まった。

平成15年度時点で岩田団地は、全670世帯のうち、約39%がブラジル、ペルー国籍の外国人で、豊橋市内の県営団地では一番割合が高い。



団地で開いた夏祭りでブラジル料理

以前は、ごみ出しや駐車マナーなどの問題で外国人入居者とのトラブルが絶えなかったが、ごみ分別収集の勉強会や駐車場の利用などをポルトガル語でも表記した。

団地自治会役員に外国人も参加するなどしたことで次第に共生が進み、平成17年度には厚生労働省が進める外国人との共生モデル団地として愛知県から「外国人共生支援住宅団地」に指定された。

(3) 東岩田の町並み

有数の住宅地 東岩田は、一丁目、二丁目、三丁目、四丁目と行政的には区画されており、それぞれが区長を持っており4区で一つの総代区域をなしている。東岩田地内は、一丁目、二丁目の一部を除いて、ほとんどの土地が田や畑であったが、岩田第二土地区画整理事業により豊橋市内でも有数の住宅地に生まれ変わった。

住宅が建ち始めたのは昭和50年（1975）頃

からである。その頃は、東岩田二丁目10番地の交差点辺りからは、県営岩田団地の一階の入口を見ることができたほどであった。その後、続々と住宅建設が進み豊かな町並みとなった。

メインストリート 東岩田町内を通る主要な道路はなんとと言っても豊岡中学校前の交差点



岩田駐在所交差点から東を望む

から東（岩崎方面）に延びる道筋である。

道路沿いには、中消防署東分署、岩田駐在所、ガソリンスタンド、信用金庫、まつり道具用品店、寿司屋、飲食店、食堂、写真店、スーパーマーケットなどが立ち並び、にぎやかな町並みを形作っている。

最近、内科医、クリニック、歯科医などが開業し医療面でも充実してきた。また、大型のドラッグストアやコンビニエンスストアも開店し、いっそう買い物が便利になった。



東岩田二丁目10番地の交差点から西を望む

この道路を東進すると、やがて、北から南に走る東三河環状線と交差する。この環状線

は、将来は豊川市と結ばれ東三河の大動脈となることが期待されていたが、多米地内のトンネル工事が未着工で、すでに工事の一部が完成している石巻地内に通じていないのが残念である。

しかし、湖西・三ヶ日方面から多米峠を経て国道1号線へ通じる道路として交通量がかなり増えている。



東三河環状線（東岩田あたりの交差点）

さらに、左右に田畑を見ながら東進すると東陽中学校を経て「東海の尾瀬」として市民から親しまれている「葦毛湿原」のある岩崎町まで延びている。

豊かな住宅街 二丁目、三丁目、四丁目は住宅街を形作っている。まだまだ空き地も多く発展の余地を残している。三丁目、四丁目あたりは、近年、マンションが多く建てられ建物の高層化が目立つようになった。また、浜松、湖西地方の自動車産業関係の工場で働く外国人向けのアパートも多く見られるようになった。



東岩田二丁目から三丁目あたりの住宅街を望む



東岩田三丁目あたりの住宅街



東岩田四丁目あたりの住宅街

三つの公園 町内には、北郷中公園（一丁目）、九つ橋公園（二丁目）、万口公園（三丁目）と3つの公園がある。

九つ橋公園、万口公園では、子ども会の朝のラジオ体操や盆踊り大会が開かれ親しまれている。中でも、万口公園は、面積が広く、野球やソフトボールなど町内の球技大会が開かれる。また、お年寄りによるグランドゴルフ、少年野球チームの試合や練習にも利用されている。



北郷中公園（東岩田一丁目3）



九つ橋公園（東岩田二丁目15）



万口公園（東岩田三丁目4）

（4）平川本町の町並み

変わる町並み 平川本町のほぼ中央に位置する住民会館は、平川本町土地区画整理事業で、地域発展の礎となることを祈念して建設された。

西部の路面電道路沿いには、一般店舗が連なっている。平川本町の近くにスーパーマーケットが3店舗ある関係で、町内には八百屋が見当たらない。

平川本町の北部には昔をしのぶことのできる檜、椎など貴重な高木や竹やぶが見られる。これらの木々や竹林は、防風林として植えられたものだが、平川新田の移り変わりを雨の日も風の日も、じっと眺めてきたに違いない。だが、昔を語る木々や竹林を持つ家も、今では数戸となってしまった。

土地区画整理事業により生まれた保留地と民有の宅地には近代的な住宅が数多く建設された。

近年、ブラジル人専用の住宅が5棟建てられ町内にブラジル人が多く住むようになった。

かつて農地だった所にアパート、マンションが建てられた。また、単身者用のワンルームマンションも立ち並んでいる。住宅街の中央には公園が造られ、園内には遊具、砂場などの施設が完備している。また、緊急事態に備えて防火水槽も設置されている。



平川本町住民会館（平川本町二丁目）



南西部にある医療機関（平川本町一丁目）



路面電道路沿いの町並み（右側が平川本町一丁目）

（5）平岡区の町並み

静かさにぎやかさ 平岡区は平川南町と豊岡町の2町より成り立っている。平川南部土地区画整理事業によってできた地域である。

豊丘高校、金融機関宿舍がある住宅地、店舗が連なる市電通り、静かさとにぎやかさの両面を持っている町である。



子どもの遊ぶ豊岡公園



運動公園電停付近より南西を望む

(6) 北岩田の町並み

北岩田 北岩田は、かつて一区から三区に分かれていた。しかし、北岩田二区は30数年前に、土地区画整理が行われ、その後、北岩田二区は平川本町という呼び名に変わった。この北岩田の三つの区の中で最も人口が急増した地区は平川本町で町の様子も一変した。



運動公園通りを井原方面に向かう新型車輛

市電は運動公園前まで延長され交通の便が大変よくなった。土地区画整理事業が終わる昭和50年代に入ると田や畑が宅地になり新しい家が建ち並んだ。

北岩田には、岩田町字（居村・北郷中の一部）と東田町字井原という字名が残っている。この地区は区画整理が行われなかった。そのため古き時代の面影を今もとどめている。



むかしの面影を残す東田町字井原の東端の細道

北岩田三区の東部は土地区画整理事業によって宅地が造成された。その影響で、20～30年ほど前に比べて西部の旧居村地区の10倍ほどに人口が膨れ上がった。旧居村地区では生垣で囲まれた家を今でも多く見ることができる。



昭和50年代から新しい住宅地となった北岩田一丁目

北岩田の中で最も早くから開けていた地域が北岩田一区で、この地区には、昔から農地は殆んどなく、路面電車道路沿いに商店や飲食店が軒を連ね住宅も建ち並んでいた。

朝倉川は北岩田の住民の生活とたいへん深い結びつきを持っている。多米や鷹丘校区などとの境をなしているこの川は、多米の山奥に水源をもち、北岩田の北側を流れ、お城下で豊川に合流している。



多米や三ヶ日に通じる主要道路となっている市電通りは交通量も多い

ホタルが舞う町 特定非営利活動法人朝倉川育水フォーラムの主催で、毎年5月に朝倉川530大会を実施している。北岩田一区の町内会は、このフォーラムに加盟していて、ボランティア活動に積極的に参加している。



530活動に汗を流す北岩田一区のボランティアの人たち

「ホタルが生息する朝倉川を取り戻そう」というのが、このフォーラムの目標の一つである。それには、ホタルが生息できる環境を整えることが必要である。この条件を満たすため、朝倉川の両岸に色々な種類の木が植えられた。また、水生生物を大切にしながら魚がすめる環境づくりにも力を注いだ。植樹した木々の成長は著しく、植樹メンテナンス大



川の両岸に植えられた木も大きく成長し、ホタルの生息にとってよい環境となった

会を毎年開き、枝払いを行っている。

朝倉川育水フォーラムは、これらの事業のほかに、里山づくり、ピオトープづくり、自然観察会、水質調査、機関紙発行、ホームページづくり等多彩な行事や活動を行っている。

このように多くの人たちの手によって朝倉川の景観が保たれ、自然が保護されている。

この朝倉川沿い井原町内に、豊橋市によって、平成15年（2003）に井原ピオトープがつけられた。旧朝倉川（河川改修されるまではここが朝倉川の本流）の自然をよみがえらせ、ホタルを中心とするさまざまな生物が生息できる空間を創り、環境学習の場を創出することを目的としている。ホタルの生息には天然の清水が必要である。現在、ホタルが自然発生することを目指して、さまざまな調査や研究が行われている。

平成18年度にはなんとか自然発生をとというのが地域の人々の願いである。



ホタルが育つ環境を整える水源

ホテルの舞う里として、井原の名所、豊橋の名所として多くの人々に親しまれる日も近いかもしれない。



工事もほぼ完成し、水質と生物適応などを調査中の井原ビオトープ（平成18年）

井原 井原には、東田町字井原と井原町と井原の名がつく地名が二か所ある。

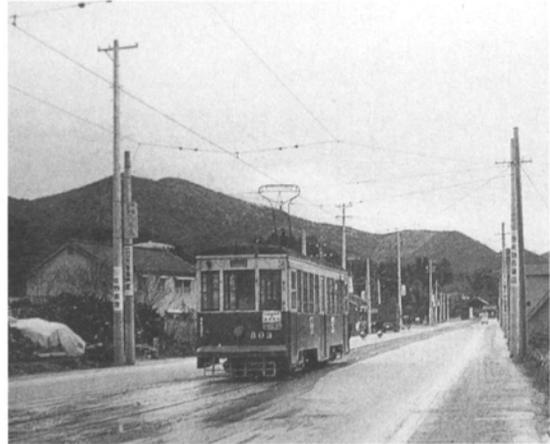
井原の電停で赤岩口行きと運動公園前行に市電の軌道が二股に分かれている。この交差点は交通量も多く井原町の中心をなしている。



軌道は井原から別れて運動公園前へと延びている。

愛知県下で唯一残っている豊橋の路面電車が、この地区を走っている。「井原」「運動公園前」「赤岩口」と岩田校区は、三つもの電停を持っている。

競輪場前から赤岩口間は、昭和35年（1960）に単線で開通した。開通した当時は、道路もまだ舗装されてなく、雨降りの日は、水たまりがあちこちにできた。



昭和35年開通当時の赤岩口方面



同じ場所から撮った現在の様子

上の写真は開通当時の赤岩口方面を撮ったもの。その下の写真は、ほぼ同じ位置から撮った現在の姿で、45年間のめざましい発展ぶりがうかがえる。競輪場前から赤岩口まで延長されると同時に、赤岩口に車庫も新しく作られ、車輛の整備が行われている。



車輛の整備が行われている赤岩口の車庫

「井原」から「運動公園前」は、昭和57年(1982)に開通した。延長区間がわずか600mとはいえ、路面電車の新線開業は「全国でもめずらしい」と、全国的な話題となった。路面電車は沿線住民の足として欠かすことができない。

平成17年(2005)8月には、他社からスマートな大型車輛(右の写真)を4両導入して、輸送力の向上が図られた。全国各地から愛好者が訪れ写真をとる姿も見かける。路面電車は、これからも多くの市民に親しまれ愛されていくことだろう。



赤岩口の電停を出て豊橋駅前に向けてさっそうと走る大型の新型車輛

ふるさと岩田 思い出のアルバム



岩田小学校(昭和7年頃)右が玄関、正面奥が講堂

豊橋復興祭協賛(豊橋公会堂)
青年演劇コンクールで岩田青年団が「復興の村」で2位入賞(昭和21年)



田尻神事青年が演劇上演(昭和21年秋祭り)



土地区画整理前の水神池



土地区画整理前の空池(新池)

田尻南部の水田地帯を豊岡中より望む(土地区画整理前)



田尻東部の水田地帯を西岩田より望む(土地区画整理前)



豊岡中南下の農道を通して登校する生徒(昭和40年頃)

第3章 教育と文化

1 岩田の教育

(1) 寺子屋から学校へ

寺子屋 明治5年(1872)の学制が発表される前の教育施設は、大別して藩校と寺子屋の2つである。郷村の百姓の子弟に対する唯一の教育機関が寺子屋であった。ここでは僧侶や神官・村の有力者や知識人が師匠となって読み書きなどを学ばせた。



祥雲寺山門

この地の寺子屋は文化年間に祥雲寺覚但和尚によって、初めて設立された。その後、庄屋藤田惣次郎、平川神明社神官宮林要人、源立寺隋道和尚、西福寺奥村月鑑らによっても設立され、幕末から明治5年まで続いた。

岩田学校 明治5年(1872)の学制公布により豊橋地方に16の小学校が設立された。岩田学校は、明治6年(1873)10月末に、寺子屋のあった祥雲寺に第7番小学校として勸善館(田尻学校)の名で開校された。

明治9年(1876)の資料によると「岩田村、戸数188戸、人口809人、公立小学校、村の西にあり仮校とす、教員1名、生徒52名(男49

名、女3名)」とあり、同年3月に勸善館は岩田学校と改称。明治12年(1879)に校舎が新築されるまでは祥雲寺の客殿が使われた。

祥雲寺 —寺子屋こぼれ話—

祥雲寺に置かれていた寺子屋には10人



明治6年当時の机の天板(祥雲寺蔵)

から15人の子どもたちが通っていた。女の子は家の手伝いをしたため、ここに通っていたのはほとんどが男子だった。

ここでは、「読み」「書き」「そろばん」の中でも、字や絵をかくことが中心だったという。

寺子屋は午前8時から午後4時というから今より少し長かったようだが、習うというより、遊びに来る子が多かったようである。



本堂の欄間にかかげられている田牛和尚の絵

田牛和尚は、絵が大変得意で、子どもたちは和尚の絵を見本にしたという。この絵は色彩が実にみごとで、現在も3枚の絵が祥雲寺に残されている。



寺子の建てた田牛和尚の墓



昭和2年当時の岩田小学校

明治・大正・昭和の三代にわたって世に多くの有名な人材を輩出。輝かしい歴史を刻む中、昭和51年（1976）には創立100周年の記念式典が挙行された。

この間、数度の統合・分離があったが、激動する時代にあっても、児童の教育は言うに及ばず、地域社会の向上をめざす教育の場として、全村（全町）の支援を得ながら教職員が一丸となって岩田小学校の伝統を築きあげてきた。昭和26年（1951）岩西小学校が分離、独立、開校。昭和54年（1979）4月には豊小学校が分離、独立、開校した。

2 岩田の学校

(1) 豊橋市立岩田小学校

所在地 中岩田四丁目1番地の2
 開校 明治6年10月末日
 教職員数 男18、女33 計51名
 児童数 男子502名、女子483名
 （内、外国籍 125名）
 学級数 31（内、特殊学級2）



教育目標

「校訓」 みんなで 明るく たくましく
 めざす児童像

- ・思いやりのある 明るい子 （徳）
- ・よく見 よく聞き 深く考える子（知）
- ・元気に運動 最後までがんばる子（体）

経営方針として、「一人一人の子どもはかけがえない存在」「一人一人の子どもの生命を輝かせる」「子どもの最大の教育環境は教職員」を合言葉に、「全職員が一致協力、明るく活力に満ち感動に溢れた教育活動を推進し、家庭・地域の期待にこたえる」としている。

(2) 豊橋市立豊岡中学校

所在地 中岩田一丁目5番地の2
 教職員数 男20、女16 計36名
 生徒数 男子253名、女子272名
 （内、外国籍 男8名、女13名）

教育目標

「自立・友愛・創造」を理念に、人間性豊かな生徒の育成につとめる

- ・責任を持ち、すすんで行動する生徒
- ・思いやりをもち、人や物を大切に
する生徒
- ・たくましさをもち、自ら学び考える生徒

昭和22年（1947）、6・3制の教育制度が発足し、義務制の新制中学校が置かれた。

中学校は独立校舎にするという閣議決定がありながらも、校舎建設についての予算はなく、豊橋市も例外ではなかった。

岩田地区、岩西地区、多米地区、東田地区が統合され東部中学校として発足した。本部は、現在の豊橋商業高校に置かれたが、一部は東高校に、また一部は岩田小学校にと、生徒たちは分散して教育を受けなければならなかった。翌昭和23年（1948）に、東部中学校は、牛川地区、下条地区とともに青陵中学校に合併された。

遠距離にある青陵中学校へ雨の日も風の日も通学する生徒たちの難渋する姿を目にして、校区内の父母より中学校誘致の強い要望が湧き上がった。各町総代、有識者が選出され、建設委員会を結成、着々と中学校新設に向けて準備が進められた。中学校建設には、第一に敷地の問題があった。

敷地選びが難航する中「田尻の八幡神社の境内地では」との話がでた。ここなら校区の中心であり異存なしということで、委員会は田尻総代に境内の開放を申し入れた。

総代は再三再四総集会を開き、協議の結果、児童教育のためにと大英断をもって神社境内を提供することを全町挙げて賛成するに至った。当時の宮司も積極的に賛成した。しかし、神社庁より強い反対があり、宮司は窮地に陥る事態もあった。

敷地代金についても、田尻町としては教育のためだから、あくまで提供の趣旨で進みたいとして、神社移転費の一部わずかな額で了承された。ただし、廃校の場合には、田尻町に無償で返還するという条件で決着した。このような経緯で、現在の地に豊岡中学校の敷地が確定した。

境内は、年輪300年の檜、椎の木がうっそうと生い茂る昼なお暗き厳かな鎮守の森であった。当時は駐留軍の支配下にあり、学校建設も軍の許可が必要で、進駐軍は市長、建設委員長立会いの下で面倒な調査をした後許可した。豊橋の財政はひっばくしており、地元は、建設費の地元立替の要請を受け650万円を借り入れ、市に立替えた。

敷地内の大木の抜根作業も、大変な仕事であった。整地は住民の勤労奉仕によって進められた。校区民の熱意と協力を礎として、昭和25年（1950）4月、仮称東部中学校は市議会の決定に基づき豊岡中学校と命名され、待望の中学校が開校した。



以来、地域の発展とともに生徒数も増加し、校舎も建て替えられた。敷地も狭くなり拡張の必要に迫られたが、住宅地に囲まれて、その余地がなかった。しかし、学校関係者、PTAの努力により平成7年（1995）に拡張され、現在の広さを持つ敷地となった。

生徒数の増加に伴って、昭和57年（1982）に東部中学校が分離、独立。さらに昭和63年（1988）東陽中学校が分離、独立、開校している。

(3) 豊橋市立東部中学校

所在地 飯村北四丁目1-2

開校 昭和57年4月1日

教職員数 男30名、女22名 計52名

生徒数 男子405名、女子386名

(内、外国籍 男21名、女19名)

教育目標

生き生きとした活力ある学校生活を送らせるなかで、社会の変化に主体的に対応できる知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒を育てる。

- ・自ら学ぶ生徒
- ・こころ豊かな生徒
- ・たくましい生徒

昭和57年（1982）4月1日に豊岡中学校から分離独立し開校された。

平成15年（2003）から17年の3年間、豊橋市教育委員会・豊橋市小中学校現職研修委員会から研究委嘱を受け、「人との関わりを身

につけ 生きてはたらく力をもつ生徒の育成—ひらかれた学校づくりの実践を通して—」のテーマで研究を進め、平成17年（2005）10月に研究発表を行った。



「ひらかれた学校づくり」をめざして、地域の人々を講師に招き、東部コミュニティ大学を開設。生徒たちは、地域の人々と触れ合うことで人とのかかわりを学んでいる。

(4) 豊橋市立東陽中学校

所在地 岩崎町字野田1-2

開校 昭和63年4月1日

教職員数 男23名、女20名 計43名

生徒数 男子232名、女子252名

(内、外国籍 男10名、女13名)

教育目標

恵まれた自然環境や校区の活力を生かし、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒を育成する。

- ・自ら困難に立ち向かい、心身をきたえる生徒



・自ら自然と人を愛し、協力のできる生徒
 ・自ら知識を求め、探求のできる生徒
 環境庁長官賞も受けたことのある葦毛湿原の保護活動を、豊岡中学校から引き継いで生徒会が実践した。平成14年度より、生徒、保護者、教師が一緒になって「ソーラン踊り」に取り組んでいる。文化祭では、野外ステージを組み、全員で踊るなど、特色ある教育活動を展開している。

(5) 愛知県立豊丘高等学校

所在地 豊岡町74

開校 昭和38年4月1日

教職員数 男42名、女23名 計65名

生徒数 普通科 男子329名、女子391名

生活文化科 女子232名

教育目標

豊かな知性と円満な情操と強固な意志をかねそなえた、心身共に健康で良識を持った人材の育成を期し、以下の如く目標を定める。

自主・創造 敬愛・連帯

健康・安全

昭和38年（1963）高等学校増設運動が地元の熱意、関係者の理解と協力が実を結び、愛知県立豊丘高等学校（普通科・家政科併設）が豊岡町に新設された。

教育重点目標

- ・さわやかで生き生きと活動できる学校
- ・わかる授業・楽しい授業を目指す学校
- ・夢を育み、自己実現を図るプログラムを提供できる学校
- ・気持ちよい挨拶・身だしなみ、安全で美的な環境をもつ学校
- ・感動の気持ちを大切にしている学校
- ・部活動が充実している学校
- ・自ら学び、深く考え、主体的に行動する力が身につく学校



平成17年度から「起こせ新風 豊の丘に！どこよりも一歩先を」を合言葉に、教員・生徒一丸となって、元気で活力ある学校づくりに取り組んでいる。

3 岩田の幼稚園・保育園

(1) 学校法人豊岡学園 豊岡幼稚園

住 所 東岩田四丁目1-2
 開 園 昭和49年4月1日
 教職員数 男4名、女17名 計21名
 園児数 5歳児 男子54名 女子38名
 4歳児 65名 52名
 3歳児 45名 53名
 (内 外国籍 5名)

教育目標

「健康で心豊かな子どもを育てる」
 ・心の教育（人間教育）
 ・一人ひとりを大切にす教育（個性を大切にす教育）



一人ひとりの個性を大切にしながら、社会生活の第一歩として集団生活をする中で、友達

と関わる力をつけ、人として大切な基本（根っこ）の部分育てることに力を入れている。

(2) 社会福祉法人 岩田保育園

住 所 中岩田一丁目14-23
 開 園 昭和23年4月1日
 職員数 男4名、女50名 計54名
 園児数 5・6歳児 81名
 4歳児 84名
 3歳児 82名
 2歳児 58名
 1・0歳児 53名
 計358名（内 外国籍10名）

保育目標

「あかるく なかよく たくしく」



「ほめる・しかるも両方大事。共に遊び、見守る保育園～ひとりみんなのために、みんなはひとりのために～」をモットーに、楽しく明るい家庭的な環境作りを心がけている。

(3) 社会福祉法人育栄会 ひばり保育園

住 所 東岩田二丁目14-6
 開 園 昭和56年4月1日
 職員数 男1名、女23名 計24名
 園児数 5・6歳児 男子18名 女子14名
 4歳児 21名 12名
 3歳児 27名 15名
 2歳児 26名 15名
 1・0歳児 29名 16名
 (内 外国籍 29名)

保育目標

- ・丈夫な体の子ども
- ・きまりを守り協力できる子ども
- ・思いやりのある子ども
- ・よく考え自分でやろうとする子ども
- ・人の話を聞いたり考えられる子ども



遊びのなかで、自分の思いを相手に伝えたり、一緒に考えたり、相手の立場にたって物事を行うことで、人と人のつながりの持てる愛情深い子どもに育つよう保育することに力を入れている。

(*学校、幼稚園、保育園の園児数・児童数・生徒数は平成18年(2006)4月1日現在)

4 岩田の風土記

(1) 岩田八幡宮

田尻地内にある元村社で、応神天皇を祭神としている。風致保安林を合わせて800余坪、神域は老樹互いに枝を交え、昼なお暗き鎮守の森であったといわれている。

創立は正保4年(1647)8月吉田天王、現在の吉田神社から迎えられたと伝えられ、祭礼は毎年旧暦9月15日に執り行われていた。明治10年(1877)当時の氏子数は78戸であったと地誌に記載されている。牟呂八幡宮、羽田八幡宮と並ぶ格式を持った八幡神社であったと伝えられている。境域は南に肥沃な田園を見下ろす高台の鬱蒼とした森に囲まれて、

現在の豊岡中学校の敷地に鎮座していた。だが、豊岡中学校校舎建築の関係で遷座した。

琴平神社に合祀されるなど、戦後いく度かの遷座の後、昭和61年(1986)10月社殿を新築し遷宮。岩田八幡宮として地元住民の厚い信仰を集めて、今日に至っている。



新年をむかえた岩田八幡宮

春・秋の大祭には氏子町内から子どもみこしや山車が練り歩く。近年復活した田尻一座による村芝居・カラオケ等の芸能の奉納、岩田木遣保存会の木遣音頭奉納、岩田煙友会による手筒花火などの煙火奉納も行われる。

餅投げも境内一杯に人々を集めて盛大に行われている。また、大晦日の夜には、参拝者が境内に列をなす。



岩田木遣保存会による餅投げ

昭和50年代初頭、さびれかけていた祭礼のにぎわいを取り戻し、子どもたちに郷土の楽しい思い出を残してやりたいと、南岩田町の子ども会が子ども神輿を発案。町総代、氏子総代の了承を得て始められた行事が、今日の

祭礼のにぎわいの元となっている。このことは記憶にとどめておきたい。



岩田八幡宮の祭礼のお車と稚児さん



甘酒のふるまいを待つ子どもたち



祭礼で並んだ屋台の様子

(2) 貴船神社

岩田八幡宮の氏子によって護持されている神社に貴船神社がある。

京都貴船神社の末社で水の神様である。稲作農家にとって、水は収穫を左右する大切なものである。その水の恵みを神に祈るために大切に祀られてきた神社である。毎年、新嘗祭の日各町総代と氏子総代による八幡宮の祈禱が終ると、貴船神社祠に移動し厳粛に祭

祀が執り行われている。



貴船神社の祭祀

八幡宮境内の飛び地にあるということや稲作農家の減少などにより、その存在を知る者も少なくなった。境内地は、豊岡中学校設立の際に、代替地として払い下げられたものである。

(3) 琴平神社

参拝客でにぎわう 明治10年(1877)の神社・諸寺取調帳には、勧講不詳となっているが、田尻村源立寺伝によれば、寛永7年(1630)源立寺の北隣に金毘羅神を勧請して、源立寺の鎮守としたと伝えている。

豊橋神社誌は『寛永4年当地城主松平主殿助忠利、命じて当所田尻村を開発せしむ、時に法珂善立なる者あり、寛永7年この地に源立寺を開創し、同寺鎮守として寺内に金毘羅神を勧請して一社を建つ』と記している。



参拝客でにぎわう琴平神社

琴平神社は『岩田町田尻地内にある東三河地方に於ける有名な奉賽所で、大物主命を祀

る無格社である。境域680余坪、毎年陰暦の3月10日と10月10日とを以て祭礼を行うが、当日は近郷十数里四方より老若男女の参詣者極めて多く、人波の絶え間がない。

当日は参道に植木市が開かれるので名高い。尚、宵祭りの夜は遠近の信者が来集して、御詠歌の催しあり。現在の社殿・拝殿は昭和3年3月の改築で数日にわたって盛大な儀式が行われた』とある。〔郷土史要〕岩田尋常高等小学校編纂刊)

明治元年(1868)、政府は神佛判然令を出した。これが神仏分離の第一歩であった。

明治5年(1872)には神社制度ができ社格(神社の階級)が決められた。この時、田尻



もち投げを待つ境内いっぱいの参拝者

の八幡神社は村社、琴平神社は無格社であった。神社の称号(名前)も変わった例が多く、仏教的な祭神名、神社名は廃された。

田尻の金毘羅大権現は、琴平神社となり、祭神は大物主命になった。四国の琴平神社と同じで、船を守る航海の守護神で水難を防ぐ神として漁師・船員に深い信仰を集めた。水に関係があるというので水商売の人々の信仰も篤かった。また、「田尻村の人、近郷の人の願い事は何でもきいてくれると」いわれ、夜中の丑の刻参りも盛んに行われた。

江戸時代の文化・文政の頃から明治・大正・昭和の初め頃までは、三河・遠江から駿河あたりまで多くの参拝者を集めた。

祭礼の日には東田方面や、二川方面から金毘羅さまに通じるあぜ道は、善男善女で埋まった。琴平神社の境内からは、牛車に乗った人や、徒歩の人並が遠くまで連なっているのが見えたといわれている。

境内には立派な芝居小屋が建ち村芝居や歌舞伎が演じられた。

また、尾張地方や西三河地方の植木業者による植木市が開かれ、果樹の苗木や桜や梅な



田尻一座の公演の様子(琴平神社春の大祭)

ど庭木の苗木が売られにぎわった。こうした催しも昭和50年代末頃には衰退した。

近年はフライドポテトやクレープ店等の屋台が並び、植木市が変わって山野草展が開かれている。カラオケ大会が催され、甘酒が振舞われるなど、周辺地域の発展にともなって祭りの様子も変わってきている。

(4) 謎の一本灯籠

『田尻の琴平神社には両社権現と書いた木の額が今もある。琴平神社の奥宮の拝殿は四国の琴平神社の遥拝所のようなもので、現在ある卍(まんじ)の一本灯籠は遠い四国の金毘羅様へあげる灯籠ではなかったのではないかと思うがどうだろうか。その頃には拝殿はなく、灯籠はもっと中の中央に一本建っていたと考えられる。現在も奥に石(石座)があるが、知らずにいる人も多い。拝殿は明治24年(1891)に造られたと思う。』〔走って歩いて育ったころ〕 加藤正巳)



左が奥宮、右が一本灯籠

(5) 源立寺境内の句碑

源立寺の境内に自然石の句碑がある。

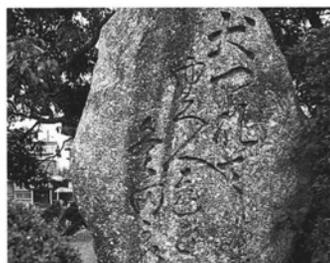
「犬つれて ゆく人遠き 冬田かな」と刻まれている。

この句は、『昭和7年冬、田中梅甫が豊橋の発展に驚嘆の眼を向け近い将来には、この岩田町一帯が市の中心ともなるであろうという思いをこめて、現在の句碑の建っている辺りに立って、眼下に広がる田圃を眺めて吟じた句』（東三河文学碑）といわれている。

梅甫は本名田中雄吉といい、明治6年(1873)1月渥美郡田原町(現田原市)に生まれた。長じて、明治35年(1902)2月、岩田村の岩田小学校に奉職。

昭和5年(1930)4月、同校を退職するまで、実に29年間岩田小学校教員として子弟の教育に情熱を注ぐとともに俳諧の指導にも力を傾けた。

梅甫の功績に対して地元では、末永く岩田の地で生活してもらうことを願って祥雲寺境内に住居を建てて贈った。



源立寺の境内にある田中梅甫の句碑

梅甫は、ここに住まいし、徳をもって村民を導き育てるとともに俳人グループ「群盲会」

を組織し、主宰として多くの門下生の指導にあたった。

昭和17年(1942)6月、惜しまれつつ亡くなった。墓石は平川山一月院にある。

(6) 平川神明宮

中世以降、御師と呼ばれる神職が全国に普及し伊勢神宮信仰が広まった。御園、御厨などと呼ばれる神宮領が各地に生まれた。その鎮守の神として、また、遥拝所として天照皇大神を祀る神明宮が奉祀された。

平川神明宮も、この流れをくんでおり祭神は天照皇大神である。寛文年間(1661~1673)、平川新田を開発した住民が、御園町の東田神明宮より、天照皇大神を勧請して氏神としたとされている。

元禄14年(1701)には、宝殿を再建した棟木が発見されている。その後、寛政9年(1797)、慶応4年(1868)、昭和26年(1951)の数回にわたり、造営や補修が行われた。

昭和54年(1979)には、本殿、拝殿、社務所が新築された。



平川神明宮

- ・所在地 平川本町二丁目14-1
- ・祭神 天照皇大神
- ・例祭日 元旦、2月15日、10月の第2土曜日・日曜日
- ・崇敬者 平川本町、平川南町、豊岡町一円の住民

(7) 如意山 祥雲寺

- ・所在地 東岩田一丁目7-2
- ・創立 寛永4年(1627)
- ・宗派 曹洞宗 全久院末
- ・開山 庵真宅公座元
- ・本尊 釈迦牟尼佛

幕末時代に寺子屋を開き、村民の教化に寄与したが、明治5年(1872)学制発布により、翌6年廃止となった。また、境内の観音堂には閻魔十王が併祀されている。



祥雲寺本堂

(8) 勝林山 源立寺

- ・所在地 中岩田一丁目14-20
- ・創立 寛永4年(1627)
- ・宗派 浄土宗 元悟真寺末
- ・開山 光誉善立和尚
- ・本尊 阿弥陀如来

寛永7年(1630)、寺の北隣に、寺の鎮守として金比羅神を勧請して祀られた。これが琴平神社である。源立寺も寺子屋を開き、村民の教化に寄与した。



源立寺参道

(9) 平川山 一月院

- ・所在地 平川本町三丁目13-23
- ・創立 元禄16年(1703)
- ・宗派 曹洞宗
- ・開山 官重義堅大和尚
- ・本尊 阿弥陀如来

元全久院の境内の南にあったが、元禄15年(1702)9月、方丈不方嶺与和尚が田尻の祥雲寺に退隠し、翌16年(1703)に寺を北方の現在の地に移転。伽藍を増築し初めて公称寺院となった。



一月院本堂

(10) 田龍山 西福寺

- ・所在地 岩田町字居村137
- ・創立 天文9年(1540)
- ・宗派 曹洞宗 竜拈寺末
- ・開山 竜拈寺四世休屋宗官
- ・本尊 聖観音

幕末時代、慶応年間寺子屋を開き、村民の教化に寄与した。本堂には本尊厨子入薬師如来が祀られている。



西福寺本堂

5 岩田周辺に伝わる民話

(1) 金次の椎の木

むかし、飯村の茶屋にある金次の屋敷に、大きくて立派な椎（しい）の木があった。毎年、椎の実がなると、金次は全部拾って一人で火にあぶって食べていた。

ある日、旅の僧が通りかかり金次に少し実を分けてほしいと頼んだが、一粒たりともやれぬと言ひ、実を拾い続けた。

僧は椎の木に向かって、「花は咲いても実はなるな！」と大声を発した。

翌年、椎の木には白い花が咲いたが、秋に実



はならなかった。金次は病に臥してしまった。金次が夢で椎の実を探していると、僧が現れ、「この世はお互い助け合い、分かち合う心がなければ、欲望ばかりが満ち溢れ、ねたみやうらみで人の心は荒れてしまう、あなたは人にほどこす心がなかった。悔い改めたら術を解いてやろう」といった。

金次は独り占めしていたことを心から悔い改めた。椎の木の根元に「花も咲け、実もつけよ 弘法大師」と書いてあった。

金次は、皆に椎の実を分けた。人に喜んでもらう嬉しさを初めて味わった。

今はこの椎の木はなくなったが、平川本町の神明社、飯村の熊野神社や吉祥寺には現在も大きな椎の木があり大切にされている。

(2) 宝珠寺の子守地蔵

今から百年ほど前のこと、大知波に住むお百姓が、子が生まれるので吉田へ買い物に来た。遅くなったので峠の下のお堂に泊まった。

草履を脱ぎお地蔵様に手を合わせてから隅のほうに静かに寝た。すると、夢にお地蔵様が現れて「男の子が生まれたが15歳の命だ、15歳の時の望みはかなえてやれ」と告げた。男の子は心の優しい立派な若者に育った。

15歳になった時、若者はお伊勢参りがしたいと言ひ出し、両親に見送られて出掛けた。

吉田の大橋に来ると、美しい女の人に一緒に連れて行って欲しいと頼まれた。二人は仲良くお伊勢参りをした。吉田の大橋まで戻ると女は急に改まって、「私は豊川の入道淵に住む竜です。お陰でお伊勢参りが出来ました。お礼に貴方の15歳の命を百歳まで延ばしましょう」といって、竜になり豊川に消えた。

お百姓夫婦と若者は、宝珠寺のお地蔵様に毎年お礼参りをした。人々はこのお地蔵様を、誰言うもなく子守地蔵と呼ぶようになり、子どもの成長と健康を願って、お参りをするようになった。

お百姓たちの通った道、大知波から鞍掛神社や駒止めの桜など頼朝伝説で知られる岩崎

の地を経て吉田の宿へ通じていたといわれる幻の鎌倉街道。その一部が今も東田町字井原には残っていると



(3) 三河富士のはなし

10月に島根県の出雲に集まった神々は日本一の山を一夜の内に作ろうと話し合った。

その中に、のろまな神様がいて、土を持って豊橋まで来ると夜が明けてしまった。あわてた神様は出雲に帰ってしまい、後に残された土が三河富士（石巻山）だという。

(4) 山の背比べ

昔、石巻山と本宮山が、自分の方が背が高いといつも争っていた。周りの神々が、争いが止むように背比べをさせようと、両方の山の頂上に樋を架け、水を流したところ、水は勢い良く石巻山側に流れ落ち石巻山の負けとなった。それ以来、石巻山を少しでも高い山にしてやりたいと願う人達が、山に登るときに小石を持って上り、山頂に置いて来るようになった。

今でも山上の石巻神社にお参りするときには麓から小石を持って登り、灯笼や鳥居に載せると、神様が喜んで、ご利益を与えられるという。



(5) 悟本寺のお地藏様

石巻平野町の悟本寺には、肩切地藏様がおまつりされている。昔は、近くの松林の中にあり、そのあたりには悪い狐が人を騙したり悪戯をしていた。

旅の侍が退治することとし、夜密かに見張っていたら、若い娘が歩いてきた。目の前を通り過ぎるとき、エイ！と刀を振り切った。カチーンと音がして刀から火花が散った。よく見ると肩を切られたお地藏さんがいた。お侍はお詫びにお地藏様のお堂を建てて祀った。平野の人達は娘の身代わりとなったお地藏様を肩切り地藏と呼び、お参りをした。

その後、隣にぼっくり地藏様を祀ってある。長寿社会になった今、元気で長生きして、ある日ぼっくりと死を迎えられるように、とお

願いする人々が遠方からも大勢お参りにきている。

(6) 徳合長者

6世紀の頃、滝蔵人正時清という人が多米の東に住んでいた。時清は河内の国（大阪）で聖徳太子の説法を聴き、太子から徳合長者の名を賜った。

2代目の長者、兼成の時、この土地はますます開けて、米が多く穫れるからと村名を多米村とした。村人達は「朝日さす、夕日輝く、榊のもと、黄金千杯、朱千杯」と徳合長者の繁栄振りをたたえた。

しかし4代目の権五郎の時、源平の乱の頃滅んだという。

今も長者ゆかりの地名や埋蔵品の言い伝えなどが残っている。

(7) 米山

昔、頼朝が岩崎の砦に立てこもって戦ったとき、敵に囲まれて、飲み水にする麓の川もせき止められてしまった。困った頼朝は夜敵に見つからないように多米の徳合長者を訪ね、白米2、3俵分けて欲しいと頼んだ。長者は欲しいのは米ではなくて水ではないかと言ったら、頼朝は、長い戦いで家来達は疲れ果てているので、死ぬ前に一度だけでも美味しい米を食べさせたくてお願いに来た、と話した。長者は頼朝が討死覚悟で来たことを知り白米を沢山分けてあげた。頼朝は米を砦の上に運び上げ、馬を何頭も連れてきて、朝日が差す光の中で米を馬の背中に浴びせかけ、米は背中から一面に飛び散った。遠くから見ていた敵は、あんなに沢山の水で馬を洗うようでは、よほど水の出る井戸があるようだ、水絶ちの攻めは効き目がないなど、水絶ちを止めてしまった。おかげで、頼朝と家来達は助かった。それ以来この砦の山を米山と呼ぶようになった。

参 考 文 献

- 西岩田のあゆみ（土地区画整理事業の記録）
土地宝典
多米地区航空写真（2枚）
完工記念誌
黎明への道 豊橋市多米土地区画整理組合の歩み
岩田小百年
郷土資料 いわた
とよおか誌
東部校区風土記
郷土史要
とよはしの歴史
豊橋市政80年史
豊橋水道50年史
岩田校区交通安全セーフティーマップ
とよはし 巨木・名木100選
豊橋市写真帖（奉賛記念）
豊橋の史跡と文化財
郷土豊橋を築いた先駆者たち
田尻誌
補田尻誌
走って育っていたころ
歴史写真帖（第1乃巻）
豊橋空襲体験記
東三河の戦国時代
とよはし 地学めぐり
東三河めぐり
豊橋の地名の変遷
郷土誌 嵩山
豊橋自然歩道
葦毛湿原の植物
東三河の歴史
東三河の文学碑
豊橋寺院史
岩田八幡宮御遷宮記念アルバム他（写真3枚）
昭和7年5月～昭和21年2月アルバム及び新聞切り抜き
- 岩田第一土地区画整理組合
岩田第二土地区画整理組合
多米土地区画整理組合
平川本町土地区画整理組合
豊橋市多米土地区画整理組合
岩田小100周年実行委員会
豊橋市立岩田小学校
豊橋市立豊岡中学校
豊橋市立東部中学校
岩田尋常小学校編纂
豊橋市
豊橋市
豊橋市
豊橋市
豊橋市
豊橋市
豊橋市役所
豊橋市教育委員会
豊橋市教育委員会
旧田尻村郷土史研究会
加藤正己
加藤正己
歴史写真会
豊橋空襲を語りつぐ会
横尾義貫
豊橋地学同好会
吉川利明
吉川利明
郷土誌刊行委員会 豊橋市立嵩山小学校
豊橋自然歩道推進協議会
豊橋自然歩道推進協議会
東三高校日本史研究会
鈴木源一郎
豊橋仏教会
中野正弘
中野正弘

昭和21年11月13日～昭和30年11月15日アルバム	中野正弘
太平洋戦争新聞切り抜き及び写真（アルバム）	中野正弘
岩田の歴史（記録綴り）	中野正弘
岩田地区変貌・新聞切り抜き	中野正弘
岩田八幡宮秋季例祭アルバム	中野正弘
人物写真（13枚）	
琴平神社カタログ	
井原の昔の地図	
井原の歴史	
豊橋東部地区旧地図	
井原のあゆみ	中島高四郎
宝珠寺の子守地藏（民話）	
金次の椎の木（民話）	
山の背比べ（民話）	
豊岡地区コミュニティーマップ	
続東三河の寺 源立寺（新聞記事）	
東海道の面影を訪ねて	飯村郷土史研究グループ
高橋とみ系さんノート	
豊橋市飯村町史	
豊橋市飯村町のあらまし	高橋とみ系
飯村町茶屋のあしあと	高橋とみ系
渥美郡史	名著出版
ふるさと豊橋	豊橋市校区社会教育委員会
豊橋市街地図	豊橋名産 山安本舗蔵版
豊岡村是	

編 集 後 記

岩田校区史編集委員会の第1回の会合が開かれたのは、平成16年10月25日でした。委員会のメンバーは、編集執筆委員3名、岩田校区総代会長、副会長を始めとする各町の総代8名のみなさんでした。

初回の会合こそ顔合わせの形式的な会合でしたが、2回目からは、発刊に向けての本格的な編集会議となりました。

まずは、参考文献の収集と聞き取り調査です。各町の総代さんたちは、嫌な顔一つ見せず、精力的に町内を歩き執筆に必要な資料の収集にあたってくださいました。「何を」「どのように書くか」の基本案作りに際しても、終始建設的な意見をいただきました。そればかりでなく、執筆にも積極的に加わっていただき多くの原稿を書いていただきました。

以来、校区の皆さまに、気軽に読んでいただける読み物風の「校区のあゆみ岩田」を目指して、15回にわたる編集会議を開き、このたび発刊の運びとなりました。

しかし、浅学菲才な編集委員ゆえ、内容についても、記述についても、不備なところも多々あるかと心配しています。誤りもあるかと存じます。また、世に問うというような大それた気持ちもありません。こうした点をご賢察いただき、何卒、私どもに寛大なお心をもちまして、ご指導を賜りますよう心からお願い申し上げます。

末尾になりましたが、資料を提供いただいた皆さま、執筆等にご意見やご協力をいただいた皆さまに厚く御礼を申し上げ、編集の後書きとさせていただきます。

岩田校区史編集実行委員

岩田校区史執筆責任者

川瀬 芳彦（東岩田） 服部 亘志（北岩田三区） 大野 脩（北岩田三区）

岩田校区史編集実行委員

篠原 秀嗣（中岩田三区） 阿部 純一（北岩田一区） 伊達 勲（平岡区）
石川 守（中岩田一区） 井澤 博生（東岩田） 小池 真宏（中岩田六区）
阿部 準治（中岩田六区） 伊藤 皓敏（中岩田一区） 佐々木正男（東岩田）
鈴木 良和（中岩田二区） 仁木 英明（平川本町） 大久保捨雄（平川本町）
西村 吉光（中岩田二区） 伊藤 市郎（中岩田二区） 大野 庄一（北岩田三区）
坂神 守人（平川本町）

サポーター

石川 周子（豊橋市職員） 石川 欣吾（豊橋市職員）

協力者

皿井 信（東三河野鳥同好会会長） 瀧崎 吉伸（豊橋市立東部中学校）

校区のあゆみ 岩田

平成18年12月25日発行

編 集 岩田校区総代会
岩田校区史編集委員会

発 行 豊橋市総代会
印 刷 株式会社 きょうせい

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOY INK
Trademark of American Soybean Association

